502
293

ト26T-31
502-293

マルクス學研究

高畠素之 著

株式會社 大鐙閣刊

大正
12.6.18
購求

序

本書は舊稿の蒐集ではあるが、謂ゆる文集ではない。マルクス學に對する私の立場と、『マルクス學研究』といふ本書の看板とに照らして、前後脈絡ある一篇の長論文と見て頂かねば困る。

私は第一章に於て、マルクスの略傳を紹介し、同時に其著述史を一瞥した。之れはマルクス及び其學說を主題とする本書の序幕として當然の順序であらう。次ぎに私は第二章に於て、マルクス說に對する私の立場を明かにした。私はマルクス說を哲學、社會學(歷史觀)及び經濟學の三方面から觀察した。そして哲學及び社會學の兩方面に於ては私はマルクス說を採らず、經濟學に於ては全然マルクス說に心服する旨を斷つた。然らば私は哲學及び社會學に於て、如何なる立場にあるか。第三章は私の哲學的立場を明かにしたものである。此章

は拙著『社會主義と進化論』に納めた『唯物論と認識論』と題する一文と大同小異であるが、本書の聯絡上省略を許さない。第四章はマルクスの歴史觀に對する、私の立場の一端を示したものである。私は更らに、第五章以下に於て、マルクス經濟學の紹介及び辯護を試みた。之に比較的多くの頁を費したのは、マルクス經濟學の紹介及び辯護が、同時に又、私の經濟說の紹介及び辯護に當ることを承知してゐるからである。

マルクス學を取扱つた拙稿の中で、聯絡上本文に收容する餘地のないものは總て附錄に隔離した。附錄の最終篇『收奪者の收奪』は、內容上『資本論』第一卷の結尾を成すもので、曾て堺、河上兩氏に依つて譯出された唯物史觀要領記と並んでマルクス古典美の双璧と稱せられる。私は忠實に逐語譯した。

各篇とも、最初から本書を豫期して書いたものでないから、多少の重複は免れない。之は厭なことだが已むを得ない。

大正八年十一月三日

高畠素之

目次

第一章　マルクスの生涯及び其著述 ……(一)

一、生ひ立　二、ライン新聞時代　三、巴里時代　四、ブルッセル時代　五　共產主義者宣言の發表　六、新ライン新聞時代　七、倫敦に遶る　八、國際勞働者協會の設立　九、資本論第一卷成る　十、巴里一揆の勃發　十一、安らかな眠へ

第二章　マルクス說と私の立場 ……(三七)

一、何もかも自分の爲　二、マルクスの人物と學說　三、マルクスの哲學　四、マルクスの歷史觀　五、マルクスの經濟學　六、マルクス經濟學反對論

第三章　唯物論とカント哲學 ……(五二)

一、カントノ偉大なる點、二、ロックの認識論　三、カント說との關係　四、カン

トの認識論　五、唯心論との關係　六、唯物論との異同　七、實在と現象　八、墮落せるカント

第四章　唯物史觀說の改造……（七四）

一、用語のトンチンカン　二、生產技術と經濟的變化　三、生產機關の決定力　四、生產と生產關係　五、改造の第一點

第五章　勞働價値說及び剩餘價値說……（八七）

一、マルクス經濟論の出發點　二、財貨と商品　三、使用價値と交換價値　四、交換價値は社會的關係　五、共通の第三者　六、交換價値と價値　七、社會的に必要なる勞働　八、價値と生產力　九、勞働力は商品　十、勞働力の商品性と資本主義　十一、勞働力の價値　十二、利潤の出處　十三、利潤は勞働の生產的消費より生ず　十四、剩餘價値と可變資本　十五、必要勞働と剩餘勞働　十六、勞働時間と貨銀と剩餘價値　十七、流通行程は剩餘價値を實現す　十八、マルクス批評家の持徵　十九、一般的効用と價値　二十、効用は價値の制限　二十一、富に對して自然を無視せず　二十二　需給とは沒交涉　二十三、『自然物』の價値　二十四、剩餘價値反對論の類別　二十五、福田博士の帽子の比喩　二十六、社會全體に價値の剩餘なし　二十七、泥捧の剩餘價値

第六章　資本論第三卷まで……（一四四）

一、はしがき　二、資本論矛盾說の矛盾　三、資本論前期の諸著　四、資本論第一卷の制限　五、第一及第二卷の目的　六、平均利潤及び生產價格　七、利潤逓減の法則　八、獨占の出現と利子　九、地代の種類及其本質　十、修正說の修正を要す

附錄

マルクスの貧困增大說……（一六九）

富と價値……（一八五）

『勞働經濟講話』を讀む……(一九八)
收奪者の收奪……(二一七)

マルクス學研究

第一章　マルクスの生涯及其著述

1　生ひ立

カルル・マルクスは一八一八年五月五日、獨逸最古の都會たる、モーゼル沿岸のトリアー（英佛語トレーヴス）に生れた。時は恰もライン諸州が普魯西領となりたる後四年であつた。當時普魯西は『神聖同盟』に加入し、佛蘭西の異端邪說を一掃すると共に、一方キリスト敎的獨逸思想の普及に努めてゐた。異端なる佛蘭西人は獨逸ライン諸州に於て人類平等の主義を宣べ、一千年來の迫害と壓制との呪より猶太人を救ひ、之を市民となし人類となすことに、日も維れ足らざる有樣であつた。然るに『神聖同盟』のキリスト敎的獨逸思想は遂に佛蘭西の平等主義を斥けて古き呪の復活を要求した。

マルクスの生後幾ばくもなくして、猶太人はキリスト教に改宗するか、公職を抛つて公事と全く關係を斷つか、二者其一を選ぶべしとの勅令が下つた。

マルクスの血統は猶太人種であつたので、彼れの六歳の時、父母は改宗してキリスト教徒となるの已むなきに立ち至つた。マルクスの父母及び血統に就いて、獨逸に於ける著名のマルクス主義者にして、リーブクネヒト、ローザ●ルクセンブルヒ等と並んで今次大革命の急先鋒となつたクララ●ツエトキン女史は次ぎの如く言つてゐる。『此偉大なる人格、此天才的の思想家が如何にして出現したかの問題を解決するに當り、普通の學說は何の役をもなさぬ。なるほどマルクスの父母は利發な善良な人々であつた。然し彼等は理智的にさほど非凡な所があつたらしくもない。又、父方にも母方にも、曾てマルクスに比すべき大知識の出現した記錄が存して居らぬ』と。

マルクスは斯くの如き父母の間に生れた第二子で、兄弟は澤山あつたが、社會に頭角を現はしたのは彼れ一人であつた。彼れの少年時代は學業優等で、而かも活潑でいたづらの、愛らしい腕白小僧であつた。彼れは時々皮肉な詩を作つて人を罵倒したりしたが、少しもセヽ細しい所のない、素直な無邪氣な性質であつたので、先生にも朋輩にも一般に可愛がられてゐた。

其頃の彼れの最も仲善しな遊び友だちと云へば、エストファーレン家の二子、卽ち兄のエドガアと妹のイエンニイとであつた。(此イエンニイは後にマルクスの妻となり、エドガアは普魯西の大臣となつた)。此二人の父エストファーレンはマルクスの文學的趣味を養ふに最も貢獻した人で、マルクスは父よりヴォルテールとラシーヌとを讀み聞かされる時、一方このエストファーレンに依つてホーマアとシエキスピーヤとを讀み聞かされた。

2 ライン新聞時代

かゝる間に彼れは普通教育を了へた。そこで最初はボン大學に、次いで伯林大學に入つたが、彼れは先づ父の意を滿たす爲に（マルクスの父は法律家であつた）暫く法律を學び、後ち自らの意を滿たす爲に歴史及び哲學を研究した。

伯林大學在學中彼れはブルノー・バウエルに引立てられた。然し彼れが大學の課程を終へた頃には、バウエルは既にボン大學の教授に轉じてゐた。そこでマルクスは一八四二年、ボン大學の哲學講師たらんと企てたが、バウエルは自己がしば〳〵監督官と衝突せる經驗よりして切に之れを諫止したので、其計畫は遂に放棄された。

然るに恰も善し、此とき一層望み多き活動の舞臺はマルクスの爲に開かれた。當時、自由反抗の氣分はライン諸州に横溢し、ブルヂョアの有志者間に新聞發行の計畫成り、マルクスは遂に其異常なる材能を認められて同新聞の主筆に聘せられた。之れ卽ち『ライン新聞』(Rheinische Zeitung) であつて、マルクスは當時僅かに二十四歳であつた。

彼れは此新聞で間斷なく檢閲官と戰つた。そして彼れが人心を贏ち得る驚くべき魅力は此の時既に發揮された。檢閲官は伯林政府の忌諱に觸るゝ章句を見逃すことが屢々あつたので、譴責に次ぐに譴責を以てせられ、其更任は絶ゆる時がなかつた。そこで政府は遂に二重檢閲制を設け、檢閲官の檢閲後、州長官が再び之れを檢閲すると云ふ制に改めた。所がこれ又大した功果が無かつたので、遂に一八四三年三月、『ライン新聞』の發行を禁止した。

3 巴里時代

之れより先、マルクスは其幼な馴染のイエンニイと結婚したのであるが、彼

れは此の禁止の命に接すると同時に、獨逸を去つて佛國巴里に赴き、同所でアーノルド・ルーゲと共に『獨佛年報』(Deutsch-Franzoesische Jahrbuecher) と云ふ雜誌を發行した。彼れは此誌上に於て『ヘーゲル法理學の批評』(Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie) 及び『猶太人問題』(Juden Frage) と題する二個の長論文を公にした。彼れが當時既に哲學の中から社會主義に進むの道を發見したことは、此二論文の內容が明かに之れを證明してゐる。

『獨佛年報』は後ち幾ばくもなくして廢刊となつたが、之れと關係中マルクスは其生涯の協勞者エンゲルスと相知るに至つた。エンゲルスは彼れより若きこと二歲、從來永く英國に滯留してゐたので、其唯物的思想を早くより體得し、既に全然ヘーゲル學派と隔絕してゐた。爾後、此二人は親密なる友情を結び、長短相助けて政治上にも、學問上にも、始終相携えて變ることなく、眞に模範

的な友愛協助の實を示した。

『獨佛年報』廢刊の後、マルクスとエンゲルスとは、ハイネ、エエルベック等と協力して、巴里に『前方へ』(Vorwaerts) と題する雜誌を發行し、其新結合の宣言として、一八四四年二人共著の『神聖なる家族』(Die Heilige Familie oder Kritik der Kritischen Kritik) と題する小冊子を公にした。

此書はブルノー・バウエル等のヘーゲル理想派を諷刺的に批評したものであつて、後年マルクス說の社會學的根據を成すに至つた唯物史觀說の萌芽は既に明かに此書に現はれてゐる。マルクスは當時頻發する革命的叛亂を觀察して、人類の理想を働かしむる根本の力が實に之等の社會的事實、換言すれば階級鬪爭の中にあることを明かにした。マルクスは此見地に基いて、當時の巴里を支配してゐた動搖的生活（それは實に二月革命の先驅に外ならぬものであつた）

を縱横無盡に批評解剖した。又、彼れは當時巴里で蒐集した幾多の材料に依つて、生產及び交換の諸要等が社會進化の上に演ずる重要なる役目を評價し、そして結局之等の要素が社會の發達を決定する終極の原因であることを明かにした。彼れは此書に於て、ヘーゲル學派の舊同志に辛辣の質問を向けて言つた。『彼等は自然、自然科學、及び產業に對する人類の諸關係を閑却してゐるが、そんなことで歷史の一語をも理解することが出來ると信じてゐるのであらうか。彼等は時代の產業、實際生活に於ける直接の生產方法を理解することなしに、其時代を實際に知ることが出來ると信じてゐるのであらうか』と。之等の片言雙語に依つても、彼れが當時如何にヘーゲルの理想主義を脫却して、唯物史觀の見解に達してゐたかを知ることが出來る。此書は不幸にして英譯がない。先きの『猶太人問題』及び『ヘーゲル法理學の批評』等と共にフランツ●メーリンク編『マルクス●エンゲルス●ラッサルヽ遺稿集』(Aus dem Literarischen Nachlass von K. Marx, F. Engels und F. Lassalle, herausgeben von F. Mehring) の中に納められてある。

マルクスは此の間專ら經濟學と佛蘭西革命との研究に從事し、同時に絕えずペンを以て普魯西政府と戰つてゐたが、普魯西政府は當時有力の佛國大臣ギゾウに迫つて、遂にマルクスを佛國外に放逐せしめた。

4　ブルツセル時代

そこでマルクスは巴里を去つて白耳義ブルツセルに趣き、同處で勞働者協會の設立に盡力し、『獨逸●ブルツセル新聞』(Deutsch-Bruesseler Zeitng) に投稿し、又一八四六年自由貿易主義者の大會に招かれて自由貿易に關する講演を試みた。

一八四七年六月、マルクスは有名なる『哲學の窮乏』(La Misere de la Philo-

sophie）を公にした。之れは其前年公にされた佛蘭西の無政府主義者プルードンの『窮乏の哲學』を批評論駁したもので、素と佛蘭西文で書かれた。獨逸譯は一八八四年エンゲルスの手で公にされた。英譯（The Poverty of Philosophy）もある。

マルクスは巴里滯留中、幾多の佛國社會主義者と知合ひになつた。當時の巴里は何しろ革命的動亂の渦中にあつたので、思想界に於ても社會主義者のモテ方と云ふものは恐ろしい有樣であつた。マルクスは總ての社會的傾向の觀察者として斯くの如き現象に非常なる興味を感じた。『哲學の窮乏』は實に斯くの如き興味と觀察との結晶であつた。當時一部の社會主義者の間には、極度の貧困を目して革命的生命の豫備的條件となすものがあつた。又、革命の原動力を社會の物質的條件に求めないで、個人の心理的自覺の中に求むる者があつた。そ

してプルードンは實に、此兩傾向の最も有力なる代表者であつた。マルクスは其唯物主義の立場から、之等の『ブルジョア的空論』を論破するの必要を感じた。斯くの如き四圍の必然から主じたものが、卽ち此『哲學の窮乏』である。

此書の公にされた同じ年（卽ち一八四七年）マルクスはブルッセルの勞働者協會に於て『賃銀勞働と資本』（Lohnarbeit und Kapital）と題する講演を試みた之れは後、一八四九年四月四日以降の『新ライン新聞』紙上に連載され、其後また獨立の小冊子として公にされた。英譯（Wage-labour and Capital）もある。河上博士の手になつた邦譯もある。

此書は其れより十二年後に公にされた『經濟學批評』及び更に其後に公にされた『資本論』の萌芽とも目すべきもので、マルクス經濟論の骨子を頗る平易な言葉で書き綴つたもの、七十年後の今日尙、我々が多大の興味を以て玩味す

ることの出來る名著である。

元來マルクスの學說には、其社會學的方面に唯物的史觀あり、經濟學的方面に價値論、剩餘價値論等がある。そして前者は主として佛蘭西の歷史的事實及び社會主義者の思想より學び、後者は殆ど總て英國から學んだ。然るにマルクスは其ブルッセル滯留以前までは英國のことを知らず、其注意は全く佛蘭西方面に集つてゐたので、隨つて其學說の形成に於ても、佛蘭西を背景とする唯物史觀の方が先きに成立した。

所が一八四五年の春、マルクスはエンゲルスに伴つてブルッセルから英國に旅行した。此旅行はマルクスの思想發展の上に、特筆大書すべき一事件であつた。なぜならば彼れが英國の資本主義經濟學に接觸するに至つたのは、正に此時に始まつた。彼れは英國到着後、暫らくの間は、かねてエンゲルスの蒐集して置いた諸種の經濟書及び其拔萃、並びにマンチエスタア其他の圖書館にある經濟書をば實に『飽くことを知らずに貪り食つた』。それは一八四五年夏の事で、マルクス經濟論の種子は此の時蒔かれたものである。そして其最初の收穫は實に此『賃銀勞働と資本』であつた。

we must respect his attitude
For study

マルクスは此書に於て、資本の根底を成す利潤が、勞働（嚴密には勞働力）なる商品賣買の事實、及び此商品を勞働者から買ひ取つた資本家が、それを生產行程に於て生產的に消費するの事實に淵源することを明かにし、資本が一個の歷史的所產であること、又た資本と勞働との利害が全然相衝突すべき性質のものなることを闡明して、階級鬪爭の社會的必然を暗示した。マルクス獨特の經濟論は既に玆に現はれてゐる。

マルクスは先きに巴里に在りし時『共産主義者同盟』(Bund der Kommunisten)なる革命的結社の首領連と交際してゐたが、ブルッセル滯留中エンゲルスと共に之れに加盟した。

此同盟は一八三六年、獨逸亡命者に依つて巴里に設立され、マルクスの入會前にありては、多少の陰謀的臭味を帶びてゐたが、今や全く其性質を一變して、共産主義傳道の單純なる一機關となつた。此同盟は獨逸勞働者倶樂部のある處には、必ず其聯絡を設け、英蘭、白耳義、佛蘭西、瑞西に於ける獨逸人倶樂部の殆ど全部と、獨逸に於ける多くの倶樂部との主なる會員は、皆なこれに加盟した。

共産主義者同盟の性質變更は、一八四七年に開かれた二回の大會に依つて完成され、其第二回大會に於て、宣言の起草をマルクス、エンゲルス兩人に一任した。之れ卽ち有名なる『共産主義者宣言』(Das Kommunistische Manifest)であつて、翌一八四八年一月末はじめて獨逸語にて脫稿され、それが倫敦に於て印刷に附せられ、最初の一冊が出來上つたのは實に二月二十四日のことであつた。

此宣言は近世勞働運動の礎石とも言ふべきものであつて、其何づれの部分がマルクスの手に成り、何づれの部分がエンゲルスに依つて供給されたかは問ふべきでない。マルクスとエンゲルスとは、其事業に於て友情に於て死に至るまで一體なりし如く、此宣言に於ても亦、徹頭徹尾一心同體であつたのだ。

此宣言の邦譯は曾て幸德秋水、堺利彥兩氏に依つて試みられたが、不幸にして發賣禁止となつた。最近河上博士は『社會問題研究』第二冊に於て、其梗概を紹介された。『一個の怪物歐洲を徘徊す。共産主義の怪物卽ち是なり』といふのが、此宣言の序文の書き出しで、第一章の劈頭には彼の有名なる『由來一切

社會の歴史は階級闘爭の歴史なり』の一句があり、最後の章の末尾は同じく有名なる『萬國の勞動者團結せよ』の一句で結んである。其内容は封建制度の倒壞より、近世資本家制度の出現に至る經路を解剖し、總ての社會制度と同じく資本家制度も亦、其内部の經濟的事情より必然に倒壞して、新らしき共産社會の實現を呼び起すべき順序を明かにし、斯くの如き經濟的事實が勞働者の階級的自主運動を喚起して、結局勞働者の政權獲得に至るべきことを力説したものである。

6　新ライン新聞時代

前にも言ふ如く、『共産主義者宣言』は二月初旬に發表されたものであるが、同月二十二日、革命の噴火口は十八ヶ年靜止の後、再び茲に爆發した。そして其餘波は四方に波及した。ブルッセルも亦、之れが影響を受け、激烈なる示威

運動は到る處に行はれた。白耳義政府は從來幾度か普魯西政府よりマルクス放逐の請求を受けてゐたが、茲に於て大に驚き直ちにマルクスを捕へて之を國境に護送した。

そこでマルクスは其友にして佛國州政府の一員なるフローコンの招きに應じて急ぎ巴里に赴いた。兎かくする中に、彼れは獨逸よりの吉報に接した。彼れの革命的活動の舞臺は今や其本國に開けんとしたのだ。かくて同年三月、彼れは其五年間中絶したる『ライン新聞』再興の計畫を抱いて獨逸キュルン市（コローン）に歸つた。

彼れの計畫は遂に『新ライン新聞』(Neue Rheinische Zeit-ung) に於て實現された。其記者には、エンゲルスの外、ウォルフ、ドロンケ、フライリヒラートウエールト等があつた。獨逸の新聞紙にして、斯くの如き手揃の編輯局を有し

たるものは、未だ曾て無かつたと云はれてゐる。そして其獨逸に於ける運動の綱領は、同國全部の一共和國及び波蘭復興の計畫を含んだ對露戰爭の開始であつた。

エンゲルスは記して言ふ。『新ライン新聞は、當時の民主的運動に於て、勞働階級の立脚地を防護したる唯一の新聞であつた』と。然し迫害の手は軈て來た。エンゲルスは更らに言ふ。『ライン州に於ける軍律は一八四八年に於て長期の發行停止を命じ、フランクフールトの帝國司法部は告發に次ぐに告發を以てした。而かも新ライン新聞は猶ほ平然公然として編輯刊行せられ、政府とブルジョアとの攻擊が暴を加ふるに從つて、其發行部數はます〳〵增加し、其名聲はいよ〳〵高まつた』と。

一八四八年十一月、普魯西にクーデタアの事あるや、同新聞は每號の劈頭に

於て、納稅を拒絕すべきことを說き、暴力に對するに暴力を以てすべきことを論じた。かくて一八四九年に至り、遂に二回までも起訴せられ、兩回とも幸ひに無罪の宣告を受けたが、ドレスデン及ライン諸州に於ける五月革命鎭壓の後、遂に政府の武力に依つて發行を禁止された。

『新ライン新聞』の初刊は一八四八年六月一日、其終刊は一八四九年五月十九日であつた。そして其終刊號は全部赤紙に印刷し、其卷頭にはフライリヒラートの手に成れる悲壯の詩を載せた。

7　倫敦に逃る

一八四八年巴里の六月革命以後、革命運動は漸く下火となつた。同年九月九日、ロベルト・ブルームは維那に於て戒嚴令の下に銃殺された。然し其後に至つて、諸所に急進主義者の煽動に依り革命的叛亂の勃發を見たが、いづれも勞働

者の味方を有せざる運動であつたので、權力者のために脆くも蹶散らかされた。革命的勞働者の中堅は既に六月革命の銃丸の下に亡び、或は『血塗らざる斷頭臺』と稱せられたる囚人植民地の露に萎んだ。

かくて『新ライン新聞』廢刊後佛國に止まりたるマルクスは、同國官憲のために同處を追はれ、遂に其最後の安息地たる倫敦に逃れた。倫敦に於てマルクスは、狂熱なる一部人士の提唱に成る革命再擧の運動と關係を斷つた。其後暫らくの間、『共產主義者同盟』は存續したが、倫敦に於て獨逸の運動を有効に指導するは、到底不可能なること明となり、かくて一八五二年の末、同盟は遂に解散された。

『共產主義者同盟』の解散後、マルクスは科學的研究と新聞雜誌寄稿とに一身を捧げ、『紐育トリビューン』紙の寄書家として絕えず同紙上に、政治經濟上の

一論文を寄せ、一八五九年有名なる『經濟學批評』(Zur Kritik der politischen Oekonomie) を公にした。

此書は實に後年公にされたマルクス一代の大著『資本論』の根底を成せる價値及貨幣の解剖の最初の試みであつた、マルクスは『資本論』第一卷第一版の序文冒頭に於て『茲に予が公にせんとする作は、一八五九年刊行の拙著經濟學批評を繼續したものである』と言つてゐる。第一章に於て商品を解剖し、第二章に於て貨幣及び商品流通を論じ、貨幣に關する學說史の一瞥を與へてゐる。

マルクスの『勞働價値說』は此書に於て、始めて形成したものと云ふことが出來る。尙、此書の序文には唯物史觀に關してマルクスが試みた最初の又最後の組織的叙述が與へられてゐる。

8 『國際勞働者協會』の設立

マルクスが倫敦に腰を据えて以來、時勢は次第に暗遷默移して、文明諸國に於ける狀況は漸く其の獨立の勞働運動を好望ならしめた。英國に於てはチャーチスト黨は既に滅亡に歸し、空想的勞働運動は最早勞働者を滿足せしむることが出來なくなつた。

又、佛蘭西に於ては六月革命の慘憺たる流血の後、勞働運動は一時全く屏熄したが、今や又漸く其新らしき芽を萌き出さんとしてゐる。更に獨逸に於ても亦、勞働者はラッサルレに依りて、空しき調和の夢より呼び醒まされ、漸く自主的團結の必要を感じ、獨立政黨を形成せんとするの狀態に達した。

斯くの如き狀勢の下に於て、マルクスは今や諸國の勞働運動を統括して、其萬國的性質を鼓舞し、出來得る限り各國共通の聯合運動を助勢するの時機至れりと信じた。

恰もよし一八六三年四月二十八日、波蘭に對する同情會倫敦に開かれ、各國勞働者の代表者が之れに出席したので、其の席上『國際勞働者協會』(Internationale Arbeiterassociation) 設立の議が可決された。是れより三ヶ月を經て、七月二十二日第二同情會又もや倫敦に開かれ、其席上、社會問題は盛んに討議せられ、『國際勞働者協會』設立の議再び可決された。かくて其翌年四月、勞働者の代表者が巴里から來て、獨逸、波蘭、英吉利及び亞米利加の代表者と協議會を開き『國際勞働者協會』設立の目的を以て、國際勞働代表委員會を召集すること、及び之れが準備をマルクスに一任することを決議した。

其後五ヶ月を經て、一八六四年九月二十八日『國際勞働者協會』は遂に倫敦に於て設立された。マルクスは其新團體の宣言、綱領、會則等を起草したが、其主なる目的は、之れを戰鬪機關となすに非ずして、勞働者解放運動に一箇の

中心點を與へんとするのであつた。此團體の設立は、實に十六年前、『共產主義者宣言』に依りて全世界の勞働者の前に叫ばれた、彼の『萬國の勞働者團結せよ』と云ふ訴への實行を意味するものであつた。

マルクスは此新團體の評議員會の一員に選ばれたが、此團體は元來種々なる異分子を混じてゐたので、其評議員會にも亦種々なる意見が代表された。そこでマルクスは此評議員會を指導誘掖する爲に有らゆる努力と忍耐とを費した。

當時評議員の一員にジョン・エストーンなる人があつた。此人はロバート・オーエンの門下で、勞働者の賃銀を一般に高めやうとする努力は無益である。なぜならば資本家は、此より生ずる損害を償ふ爲に生產物の價格を引上げるからである。斯くして勞働者は、生活費昂騰の結果として結局又もと通りの狀態に引下げられると云ふ議論を主張したので、マルクスは之れに答へる爲に、評議

員會で一場の講演（英語）を試みた。其草稿は、一八六五年六月に開かれた國際大會にも提出されたが、マルクス存命中には遂に公にされなかつた。エンゲルスの死後此草稿が發見されたので、マルクスの娘にして英國の社會主義者アヴエリングの妻となつてゐたエリアナアの手で『價値、價格及び利潤』(Value, Price and Profit) と題する小冊子の形で公刊された。

此書の內容は或意味に於て『資本論』の綱要とも見ることが出來、又マルクス經濟論に對する一瞥とも云へる。それは單に後年公にされた『資本論』第一卷の主題を含むのみでなく、又マルクスの死後エンゲルスに依つて編纂された其二及び第三卷の內容にも觸れてゐる。マルクス經濟論の發達史上極めて重要な著述である。

9　資本論第一卷成る

一八六七年七月廿五日、マルクスの生涯の大事業たる『資本論』(Das Kapital)第一卷が公にされた。マルクスの最初の計畫では此書を三卷に分ち、第一卷は『資本の生產行程』を取扱ひ、第二卷は『資本の流通行程』、及び『資本の總行程』第三卷は『學說史』を取扱ふ筈であつたが、不幸にして第一卷を完成したのみで永劫の眠りに入つたので、後ちエンゲルスは右の第二卷の前半の草稿を『資本論』第二卷として(一八八五年)、又其後半を第三卷として(一八九四年)公にし、更にマルクス門下隨一の學者たるカウツキイは、エンゲルスの死後其委托に從ひ、前記の第三卷『學說史』を『剩餘價値學說史』(Theorien ueber den Mehrwert)として(一九〇四—一九一〇年)公にした。

右のうち『資本論』は全三卷とも英譯があるが、『剩餘價値學說史』はまだ英譯されて居らぬ。

『資本論』は資本主義の經濟を支配する理法及び動力を解剖したる最初の大仕掛けな科學的試みであつた。マルクスは資本家的生產の解剖に依つて、總ての利潤の源泉を探究し、それが勞働者より搾取せる剩餘價値の領有に存することを明かにした。マルクスは此の剩餘價値說に依つて、勞働者は資本家的生產方法のもとに、原則として其勞働力の充分の價値を受けるものであるが、それでも尙資本家に搾取されてゐることを看破した。マルクスの見る所に依れば、資本家的搾取の事實は、勞働者が自己の提供する勞働力なる商品に對して其充分の價値を與へられると云ふ原則的條件のもとに說明されなければならぬ。然らば斯くの如き條件のもとに、資本は如何にして剩餘價値を搾取することが出來るか。曰く、それは勞働者が自己の勞働力以上の價値を造るからである。卽ち自己の生產物の全價値を受けることが出來ぬからである。

マルクスは正統派經濟學の遺した價値說から、卽ち總ての生產物は其生產に費された勞働時の分量に依つて決定されると云ふ見地から出發して、勞働者が有する唯一の商品たる勞働力を解剖し、此商品こそ實に總ての利潤の唯一の源泉であることを發見した。此商品の價値は他の諸商品のそれと同じく、其生產上、社會的に必要なる勞働時の分量に依つて定まる。然るに勞働力なる商品は勞働者の身體と分つべからざるもので、此商品の生產に必要なる勞働時とは、畢竟勞働者が自己の生存を維持するに缺くべからざる商品、卽ち勞働者の衣食住を生產するに必要なる勞働時のことである。つまり一日の勞働力の價値は、勞働者の一日の生活資料の價値に等しいのである。

然るに社會の進步は、勞働の生產力の增進を促がすものであつて、此增進したる生產力の結果勞働力は資本家が之れを工場に於て生產的に消費する際、自己の價値、換言すれば自己を再生產するに必要なる價値よりも遙かに大なる價値を造る。此勞働力の再生產に必要である以上の價値は、卽ち剩餘價値であつて資本の利潤の唯一の源泉を成すものである。

マルクスは此の剩餘價値說の確立に依つて、資本家的社會に特有の周期的產業危機の原因及び其性質を說明することが出來た。彼れは、資本主義の發達と共に、資本家が勞働者より搾取したる剩餘價値を實現すべき市場がますゝ之しくなることを指摘した。資本主義は一方に生產の社會的方面を發達せしめ、他方に生產物の個人的領有を保存してゐる。富と共に貧を造る。限りなき勞働と共に限りなき怠惰を造る。生產過多と共に消費過少を造る。之れ實に資本家的生產方法に特有の社會的矛盾であつて、マルクスは此矛盾の中に、資本主義崩解の原因を見た。卽ち社會的生產と個人的領有との矛盾は、勞資階級鬪爭の

客觀的原動力であつて、此闘爭の結果は遂に資本の倒懐、勞働の勝利を以て了り、個人的領有は社會的領有となり、生産と領有との間に何等の矛盾なき社會狀態の實現せらるべきことを仄めかした。

以上は『資本論』第一卷のアラ筋であつて、マルクスは更に第二卷に於て、資本家的流通行程を研究して商品の流通、金隔機關の機能、及び資本の回轉を明かにした。そして更に第三卷に於て勞働者より搾取したる剩餘價値が産業利潤、利子、地代等に分裂する過程を闡明し、又『剩餘價値學說史』に於ては、フイジオクラット派以後リチャード・ジョースに到る、各經濟學者の利潤觀を批評的に叙述した。

10 巴里一揆の勃發

『資本論』第一卷の刊行後三年、卽ち一八七〇年、ビスマルクの鐵血政策の結

果として普佛戰爭が勃發した。マルクスは當時、氣象學者が空氣の流動を觀察するが如き冷靜の眼を以て、此事件の發展を觀測した。普佛兩國の戰鬪的勞働者は此戰爭に反對したが、其勃發は遂に之れを停止することが出來なかつた。

佛軍は遂に破れた。巴里は普軍の包圍する所となつた。此時、飽食暖衣の愛國者等は直ちに之れを敵軍に交附しやうとしたが、平素祖國を有せずと宣言してゐた勞働者等は却つて之れを防禦した。彼れらは實にチエール及び其一味の愛國者に依つて放棄せられたる巴里の共和制を防禦したのである。そして佛國のブルヂョアが其勞働階級の武器を執つて起たんことを恐れ、勝利者たる普軍の足下に拜跪するを見るや、彼等勞働者は遂に一八七一年三月十八日、共和救護のために蜂起し普軍及び自國のブルヂョアに對抗した。

之れ實に有名なるコムミユン（巴里一揆）であつて、此一揆を有効に終らし

めんことは實に『國際勞働者協會』の重大なる任務であつた。而かもコムミュンは優勢なる武力に依つて鎭壓せられ、同時に又『協會』は到る所に其公然の運動を妨げらるゝに至つた。

コムミュンの如何なるものなりしか、其奮鬪と死とは何を意味したか、それはマルクスの手に書かれたる『佛蘭西の階級戰爭』(Klassenkaempfe in Frankreich)によりて知ることが出來る。マルクスは素より『國際勞働者協會』設立者の一人として此一揆に加つたのであつた。かくて此書は、マルクス自身の實戰記であると同時に又一面に於て唯物史觀說の應用として、貴重なる歷史的價値を有するものである。英譯は "The Civil War in France" と云ふ。

11 安らかな眠へ

『國際勞働者協會』はコムミュンの沒落後、全く其地位を一變した。卽ち外に於

ては實際運動の希望全く閉され、內に於ては各派の衝突と空想的陰謀とが漸く其頭を擡げて來た。當時マルクスは協會の總取締りの任にあつたが、其事務と責任とは次第に增加するの狀勢を示した。彼れは今、何事を措いても『資本論』の續卷を完成しなければならぬ。そこで協會の組織性質に對しても何等かの變更を必要とした。是に於て、彼れは一八七二年ハーグ大會に於て、無政府主義者バクーニン一派との分離を遂げたる後、其本部を紐育に移さんことを主張し、遂に大會の承認を得た。彼れは之より『資本論』に專心することが出來た。

然し其後と雖も、彼れは尙各國、殊に獨逸の勞働運動に對して絕えず注意を拂つてゐた。一八七五年ラッサルレ派とリープクネヒト、ベーベル派との聯合大會開かれた時、彼れは長文の書を送つて其綱領に就き論ずる所があつた。當時彼れの主張は、兩派聯合の機を逸するの恐ありしため採用されなかつたが、

後年エルルフト大會に於ける綱領改正の際、悉く採用された。有名なる『エルフルト綱領』と稱するものが卽ち之れである。

彼れは元來强健なる體軀の持主であつたが、過度の勞働に依つて得た痼疾の爲め次第に衰弱を加へ、一八七〇年代には各地に其病を養ふの餘儀なきに立ちいたつた。

其上、一八七五年から一八八〇年までの間、マルクスの周圍には不幸が續いた。初めに其孫等が死んで、痛く彼れを悲ませた所へ、またエンゲルスの妻が去り、續いて一八八二年彼れの妻イエンニイが死んだ。それは彼れに取つて、如何ばかりの打擊であつたらう。ハイゲイトの墓地で葬式が濟んで、彼女の遺骸が穴の中に降されると、彼れはよろ〳〵と倒れかゝつて、僅かにエンゲルスに依つて助けおこされた。

一八八二年、マルクスは佛蘭西の社會主義者ロンゲー（彼れの女長の夫）を訪れ、それから亞弗利加の北岸アルジール邊を旅行し、次いでワイト島のヴェントノアに遊び、一時健康を恢復したが、翌一八八三年倫敦に歸つてから六週間ばかり危篤の狀態に陷つた。それから一時稍々見直したが、同年三月十四日遂に死んだ。エンゲルスが急報に接して行つて見ると、マルクスの三女エリアナアと忠婢エレンとが泣いてゐる。どうしたかと聞くと、何うも知覺が無くなつたやうだと言ふ。エンゲルスが書齋に行つて見ると、マルクスは知覺が無くなつたどころでなく、微笑を唇に滿えて全く死んでゐた。

附記。以上の外、マルクスの著書としては、一八四八年三月十三日から十八日にかけて獨逸の到る處に勃發した革命運動を評論せる『革命及び反革命』（英文 Revolution and Counter-Revolution）及び一八四八年から八仝一年にかけて

の佛蘭西の騒擾期を批評解剖した『ルイ●ナポレオン論』(Der achtzehnte Brumaire des Louis Bona parte 英譯 The Eighteenth Brumaire of Louis Bonaparte)等が最も弘く讀まれてゐる。因みに、本文載する所の諸書は悉く書肆大鐙閣計畫の『マルクス全集』中に網羅される。

第二章　マルクス説と私の立場

1　何もかも自分の爲

坊主が憎くけりや袈裟までの逆を行つて、人物を愛慕すると其人物に附屬する一切に惚れ込むと云ふ、謂ゆる人物崇拜、盲目的の沒我道樂は、僕の頗る滑稽視する所である。僕は人物に惚れ込むことはあつても、其人物の有する主義●主張●學説●思想の内容に對しては、常に冷靜の批判的態度を守るつもりでゐる。又、主義●主張●學説●思想の範圍内に於ても、其一部を受入れるが故に他の部分までを受入れねばならぬとは信じて居らぬ。善い所は取るし、惡い所は捨てる。彼方からも此方からも、善い所だけを（或は善いと信ずる所だけを）掻き集めて來て、それを自説の爲に利用し吸收し總合し組織する。何もかも自分の

爲であつて、相手の人物の爲ではない。僕は常に斯う云ふ態度で總ての人物に對してゐる。

2　マルクスの人物と學說

僕はマルクスと云ふ人物が大好きだ。あの猛烈な獸性と、總てを支配せねば已まぬと云つたやうな熱火の如き權勢慾と、そしてそれを指導し調味する鐵の如き意力と、縱橫無碍の奇略と、銳利なる頭腦と、該博なる智識と、辛辣なる掛引と、小兒の如き無邪氣さと、春風の如き溫情とは、眞に人間臭き人間の王なる哉と叫ばしめる。僕は世界史上、未だ曾てマルクスほど偉大なる人物を發見したことが無い。

然し此偉大なるマルクスの學說になると、必ずしも總てが偉大と云ふ譯ではない。或部分は既に陳腐化し、或部分は今尙ほ新鮮である。新鮮なる部分と雖

も、必ずしも總てが完全と云ふ譯ではない。

3　マルクスの哲學

マルクス說は、便宜上これを哲學的、社會學的、及び經濟學的の三方面に區分して考へることが出來る。哲學的方面に於ては、彼れは徹頭徹尾唯物的一元論者であつた。「唯物的一元論は總ての既成形而上學說（或は實在論）のうち、比較的最も眞理に近いものと、僕は信じてゐる。只、それは總ての實在論の豫備條件たるべき、認識作用の考察を缺いてゐる。宇宙萬有は唯物的に一元だと云つても、人は元來宇宙萬有と云ふ絕對的實在を認識する能力を具備してゐるか何うか。それを先づ定めなくては論にならぬ。

僕の見る所に依れば、我々の認識機關は只だ時空に制限された感覺經驗のみを許るす。我々に認識される世界は、悉く時空の有限界に限られてゐる。我々

は到底、この時空有限界以上の世界を知ることは出來ぬ。我々は只、感官の色眼鏡を通しての世界を知り得るのみである、此の眼鏡を離れての、即ちカントの謂ゆる『物それ自體』の世界は、我々の認識の外にある。そして我々の認識に屬する世界、即ち我々の感覺經驗の範圍内に於ては、總てが唯物論者の主張する通りに動いてゐる。其所には一點の『自由』がなく、只『必然』があるのみである。

故に若し、唯物論が單なる諸科學の科學として、我々の經驗界のみを其の研究對象とするならば、僕は一點も唯物論に反對する理由を見出さぬ。然るに唯物論者は、其自ら意識すると否と、公言すると否とに拘らず、事實上、形而上學（或は實在論）の繩張りに踏入つてゐる。なぜならば彼等は、我々の經驗界が即ち實在界であつて、我々の經驗の外に實在は無いと主張するからである。

此點になると、唯物論は却つて唯心論に對して一籌を輸する嫌ひがある。なぜならば、我々の經驗の外に實在は無いと云ふことは、我々の主觀の世界が即ち實在だと云ふことになつて、結局バークレイ流の極端な觀念論に落參することになるからである。此の弱味があるので、同じマルクス正統派の中でも、ポール・ラファルグの如きは、我々の五感に映じた世界ほどアテにならぬものはない、我々は自己の五感でなく物質の感覺に依つて眞理を認識するなどと云ふ、意味ありさうなナンセスを持出すことになつたのである。

兎にかくマルクスの唯物的一元論は、他の總ての既成唯物論と同じく論理の不徹底であつて、マルクスの辿つた論理の脈絡を今一歩押し進めたならば、結局僕の謂ゆる懷疑的唯物論に到達しなければ止まなかつたであらう。（第三章參照）

4　マルクスの歴史觀

次ぎにマルクス説の社會學的方面は、卽ち『唯物史觀』或は『經濟史觀』として知られてゐる。所が此説にも亦、唯物的一元論と同じ程度の論理の不徹底がある。

マルクスに從へば、『人の衣食住を生產する方法』が、卽ち『其社會上及び智識上の一般生活を決定する。』然るに『人の衣食住を生產する方法』或は簡單に『出產方法』なるものは、人間對自然の直接關係としての生產方面卽ち生產技術ではなく、人間對人間の關係、卽ち社會關係を通じての、人間對自然の關係である。然るに社會關係と云ふ以上は、必ず其れに應當した一定の、法律上（並びに道德上）及び政治上の關係がなければならぬ。我々は經濟上の關係を外にして社會關係を考へることが出來ぬのと同じく、又法律上及び政治上の關係を外にして社會關係を考へることは出來ぬ。經濟關係は社會關係の實質を示し、

法律上及び政治上の關係は卽ち其形式を示してゐる。同じ社會關係を、其の實質的方面から觀察すれば經濟關係となり、其の形式的方面から觀察すれば政治法律關係となる。經濟と法律及び政治とは、互ひに因果的關係に立つものでなくて、同位同格のものでなければならぬ。

故にマルクスが、生產方法を以て法律上・政治上その他の生活を決定するものとなしたのは誤りである。生產方法その者が、既に一定の法制關係を前提してゐる。それは決して、マルクスの謂ゆる『物質的』關係にのみ極限されるものではない。生產方法はマルクスの主張する如く、法律的及ひ政治的『上部建築』の依つて以て組立てらるべき『社會の眞實の基礎』ではなくて、法律上及び政治上の諸關係に締め括られた、社會生活上の實質的內容である。

尤もマルクスは他の一方に於て、此の生產方法その者が又更に『物質的生產

力』に依つて決定されることを認めてゐる。彼れは言ふ。『人類は社會的に其衣食住を生産する爲に、自己の意志からは獨立の、必然的の或種の關係を造る。其關係は卽ち其社會に於ける物質的生産力の發達程度に相應する生産關係である。此關係の總和が社會の經濟的構造、卽ち眞實の基礎を成すもので、此基礎の上に法律的及び政治的の上部建築が組立てられ、又之れに相應して或種の社會的自覺が生ずる事になる。』(『經濟學批評』序文)。卽ち『社會の眞實の基礎』たる『生産關係』は、『物質的生産力の發達程度』に適應するものでなくてはならぬ。換言すれば『社會の眞實の基礎』の眞實の基礎は、物質的生産力だと云ふことになる。

○

然るに此の物質的生産力なるものは、其れ自體として生ずるものでなく、更に又他の種々なる條件に決定される。マルクスは其れらの決定條件の主なるも

のとして、『勞働の熟練の平均程度、科學並びに其工藝的應用の發達程度、生産行程の社會的結合、生産機關の範圍及び能率、及び諸種の自然關係』を擧げてゐる(『資本論』第一卷第六版六頁)。卽ち其中には、科學の如き智識上の條件があるし、また生産行程の社會的結合の如き純社會的條件(既に法律上及び政治上の諸關係を前提とする所の)もあつて、社會の眞實の基礎が却つて或範圍まで、其『上部建築』に決定されることを許るすことになる。

一要するに、社會的諸關係の間に、交互因果的の連絡を求めやうとする態度が間違つてゐるので、社會的諸關係は總てが同位同列のものである。いづれが原因、いづれが結果と稱すべきものでなくて、總て同時に並存するものである。只、同じ社會生活を其内容的方面から見れば經濟生活となり、其形式的方面から見れば法律政治生活となると云ふ差異が存するのみである。

5　マルクスの經濟學

最後にマルクス說の經濟學的方面を考へて見る。マルクスの經濟學說は『資本論』前後三卷に網羅されてゐる。勞働價値說、剩餘價値說及び生產價格說の三の主要方面を含んでゐる。そして此三者の間には、首尾一貫した論理の脈絡がある。剩餘價値說は勞働價値說の必然の歸結であり、生產價格說は又勞働價値說及剩餘價値說の論理的歸結である。マルクス批評家の間には、マルクスの生產價格說は其の勞働價値說及び剩餘價値說を裏切つたものである、生產價格說は眞理であるが、他の二說は虛妄であると主張する者が多いが、僕は左樣に信じない。勞働價値說及び剩餘價値說の根底に立脚しないで、生產價格は何うしても之れを充分に說明することは出來ぬ。

然し僕は、マルクスの經濟學說が其の唯物史觀說の歸結若しくは應用であると云ふ、マルクス自身及び一般マルクス信徒の說に左程重きを置くことは出來ぬ。マルクスの經濟論は其の唯物史觀說から引離しても、結構存在の意義を保ち得る。歷史哲學に於て唯物史觀を排斥し、經濟論に於て勞働價値說その他を受入れることは少しも論理の矛盾でない。マルクス自身の主觀に於て、其經濟論が唯物史觀の應用であつたからと云ふて、我々も亦左樣に信ぜねばならぬ理由はない。『資本論』前後三卷の本文數千頁を通じて、唯物史觀を積極的に說いた所は一箇所もない。偶々それに言及した箇所はあつても、それはホンノ暗示に過ぎず、分量から云つても僅々十數頁に過ぎぬ。其十數頁を全部削除しても『資本論』の論理的連絡はそれが爲に何等の支障を受けぬ。（第四章參照）

6　マルクス經濟反對論

マルクスの經濟論、殊に其根底たる勞働價値及び剩餘價値說に對しては、批

評家側からいろ〳〵の反對論が提出されてゐるが、殆ど一つとして取るに足るものはない。但し玆で一々それを數へ立てる餘裕がないので、就中目星しいもの三四を槍玉にあげて筆を擱く事にする。

第一、マルクスは價値の要件として、物の効用性卽ち使用價値を無視したと云ふ說、マルクスは勞働が價値の唯一の源泉であることを主張すると同時に、使用價値が價値の前提條件であることを主張した。使用價値の差異がなければ交換は行はれぬ。交換が行はれなければ商品はない。商品のない所に、價値の考察は無意義である。只、種々なる使用價値としての商品が互ひに交換されるには、其夫々に共通の第三者が含まれて居らねばならぬ。それが卽ち勞働である。そして夫々の商品の交換比例は、其體現する勞働の分量に依つて定まると云ふのがマルクスの眞主張である。マルクスは決して價値の制限的條件として

の使用價値を無視せざりしのみか、却つて其れを自說の出發點と成してゐる。

第二、勞働の分量が價値の大小を決定するとするならば、生產者は怠惰であり不熟練であるに從つて、益々多大の價値を產出すべき筈であると云ふ說。マルクスは價値の大小を決定するものが個人的勞働の多寡でなくて、社會的に必要なる人間勞働の分量であることを主張する。隨つて社會的標準以上に怠惰不熟練なる者は、たとひ人一倍長時間働いても、其割りに多大の價値を造ることは出來ぬ。

第三、價値が勞働に依つて決定されるものならば、何ゆえ勞働を加へざる土地に價値があるか。曰く、土地には價値なし。地價は地代を資本に評價したものに外ならず。地代は剩餘價値の一形體である。剩餘價値は勞働價値說に依らなければ、充分に之れを說明することは出來ぬ。

第四、偉大なる藝術品の價値も亦、勞働の分量に依つて決定されるか。曰ハ、藝術上の特殊品は社會的に再生產され能はざるものである。隨つて社會的に必要なる人間勞働の分量と云ふ尺度を應用することは出來ぬ。或は藝術上の特殊勞作は、一種の獨占的性質を帶ぶるものと見ても善い。マルクスの勞働價値說は、自由競爭に依る商品交換にのみ當嵌るもので、獨占の範圍內には之れを應用することは出來ぬ。

第五、マルクスの剩餘價値說は勞働時間の短縮のみを眼目に置き、其短縮に逆比例する勞働能率の增減を無視したと云ふ說。之れは福田博士が熱心に唱へて居られる。此說は確かに一理あるものと僕は考へるが、然しさう云ふ缺點はあつたとしても、それは結局剩餘價値率の計算に影響するだけのことで、剩餘價値その者の根本理論を動かすに足りない。（附錄參照）

以上の外に尙いろ〳〵の反對論が提出されてゐるが、大抵モウ說き古したものであるから、玆に冗々しく反覆することを止める。拙譯『マルクス資本論解說』にも其一二を紹介批評してある。

要するに、僕はマルクスの人物を愛慕し、その哲學・社會學說を棄て、其經濟論の本質を全部受け入れると云ふ、一種異樣の自由批判的態度を以てマルクスを利用してゐる。

第三章　唯物論とカント哲學

1　カントの偉大なる點

私は世界の哲學史が產出した天才の中で、カントを一番偉いと思ふ。それはカントの哲學が完全であるからと云ふ意味ではない。カントの哲學には非常な矛盾がある、統一がない。

それにも拘はらず、私がカントを一番偉いと思ふ所以は、彼が哲學の急所を掴んでゐるからである。哲學の先づ解決せねばならぬ、而も從來の哲學者に依つて殆ど全く顧みられなかつた根本問題に、最大の注意を拂つたからである。勿論カント以前に於ても、此問題に注意を拂つた學者が無い譯ではない。けれども彼等は多く之を他の問題の附錄として、又それが爾かく重要だと云ふことを

自覺せずに研究してゐた。之に反してカントは最初より此問題の重要なることを意識して、之が爲に全力を傾倒した。

然らば此問題とは、哲學の急所とは抑も何か。之を一口に云へば認識論である。人間の知識の性質及び範圍に關する問題である。全體、哲學には二つの範圍がある。一は實在論、他は認識論である。實在論とは宇宙人生の根本に關する研究で、認識論とは人間が眞理を認識する、其知識の性質及び範圍に關する研究である。

そこで論理的に云へば、哲學は先づ認識論に出發し、而して後實在論に進まなければならぬ。なぜならば宇宙の實在を甲と云ひ乙と斷じても、人間の知識機關に實在を認識する力がないと云ふことになれば其れまでゞある。

處が哲學史を見ると、之が全く逆に進んでゐる。即ち哲學と云へば、其初め

殆ど全く實在論に限られてゐた。宇宙の根本は火であるとか、水であるとか、或は又物質だとか、精神だとか、さう云ふ方面の研究が哲學の全部と考へられてゐた。此、歴史と論理との矛盾を明白に自覺して、先づ認識論の研究から始めて、哲學の堂奥に進み込まうとしたのがカントである。カントは哲學史の順序を自己の哲學體系に於て轉換した。

2　ロックの認識論

然し前にも云ふ通り、認識論の研究は必らずしもカントに始まつたものではない。遠くはプラトンの如き、近くは又たロック、ヒユームの如き、皆之に對して相當の貢献を爲してゐる。殊にロックは此點に於て、最も大きな功績を遺した。

ロックの認識論は通常、經驗論若しくは感覺論として知られてゐる。其要領は左の如し。

吾々の認識の根原は經驗である。即ち知覺經驗である。吾々は先づ感官に依つて箇々の『單一觀念』を得る。即ち色とか、音とか、手觸りとか、運動とか云ふものが其れである。之等の單一觀念は、云はゞ認識の文字である。吾々は文字を連ねて綴りを造り、語を造る。それと同じやうに、吾々の心は又、之等の單一觀念を總合して幾多の抽象的概念を造る。ロックは之を『複合觀念』と呼んだ。

吾々の感官から來る單一觀念は、固より事物の箇々の屬性を示すに過ぎぬ。けれども之等の屬性は、事實上しば〳〵一定の連絡を保つて現はれる。例へば甘いとか、白いとか、ザラ〳〵するとか云ふ事は、砂糖の屬性である。吾々の感官は、之等の屬性以上を砂糖に就て敎へることは出來ぬ。けれども吾々は之

等の屬性が、しば〳〵一纒めに結合して現はれる事を經驗する。そこで吾々は、單に甘いとか、白いとか云ふ事ばかりでなく之等の單一觀念を總合して、茲に一箇の砂糖と云ふ複合觀念（抽象的概念）を有するに至る。此觀念は卽ち砂糖の各屬性が屢々、一纒めに結合して現はれると云ふ客觀的事實の反映である。卽ち砂糖の本體の寫象である。

要するに、人間の知識は總べて經驗から來る。人間の悟性と云ふものは、本來全〳〵の白紙である。其白紙に種々なる線を畫き色を施して、茲に一箇の纒つた思想知識を組立て得るのは經驗のお蔭である。

3　カント說との關係

以上、ロックの認識論は唯物的認識論と云つても善い。之をカントの認識論に比べると全く其行き方を異にしてゐるかの觀がある。卽ち唯物的認識論は、

◎認識の手段に關して經驗論（嚴密には感覺論）を主張し、認識の範圍に關して獨斷的實在論を採用する點にある。然るにカントの認識論は一方に認識の手段に關して觀念論を主張すると同時に、他方に認識の範圍に關して懷疑論を採用してゐる。卽ち唯物論者の認識論は感覺的獨斷論であるが、カントの認識論は觀念的懷疑論である。

4　カントの認識論

カントに依れば、吾々の一切の認識は、認識主體（心）と認識客體（外界）との結合產物である。認識客體は吾々の認識に內容を賦與し、認識主體は吾々の認識に形式を賦與する。卽ち悟性概念（範疇）を賦與する。吾々は此悟性概念に依つて始めて、感官から得た各種の知覺を總合して、之を一箇の經驗に纒めることが出來る。卽ち組織的認識を得ることが出來る。外界が無ければ、固より何

等の現象も存せぬであらう。然し又一方に、悟性が無ければ、吾々の感官に映ずる一切の現象即ち知覺は、唯バラ〳〵の混沌體たるに止まり、其れが統一されて一箇の表象を形づくることが出來ぬ。表象が無ければ固より經驗も無い。隨つて認識も無い。されば概念なき知覺は盲目である。知覺なき概念は空虛である。認識作用は一方に、經驗の內容を以て概念の枠を充たし、他方に概念の枠を以て經驗の內容を極める。認識は概念と知覺との結合に外ならぬ。

尤も吾々は到底、外部に在るが儘の事物、即ち事物の實體を認識することは出來ぬ。元來、吾々の經驗は悟性概念の能動作用に依つて成立する。之は前に述べた通りである。して見れば、吾々の悟性概念は、決して經驗の產物ではない。寧ろ經驗の豫備條件たるべきものである。經驗の豫備條件として、先天的に吾々の意識內に具備されてゐるものである。隨つて吾々に經驗され、認識される一切の事物は、既に豫め吾々の主觀の眼鏡に依つて着色されてゐる。事物は在りの儘に認識せられずして、吾々が理解する儘に認識される。

單にそればかりではない。吾々の經驗の內容たるべき知覺そのものが、既に吾々の主觀に依つて着色されてゐる。吾々は事物を知覺する時に、必ず之を時間空間の形式に當嵌めて知覺する。時空は悟性概念と同じく、最初から吾々の主觀內に具はれる固有本來の要素である。故に吾々の認識範圍に入り來たるものは、單なる現象に過ぎぬ。吾々の主觀の着色を脫却した。赤裸々の、唯在るが儘の事物は、到底吾々の認識に上り來たらぬものである。

そこで次の如き三の結論が得られる。

（一）吾々の研究の對象は單に現象のみであつて、事物の在りの儘の形、即ち實體、物それ自體は、吾々の研究に沒交涉のものである。

（二）單に經驗のみが認識の領域である。經驗を超越せる本體の學問なるものは、到底あり得ざるものである。

（三）認識作用は、經驗を跳躍して超自然の域に進入する時、最大の矛盾撞着に陷る。神、宇宙、靈魂なる三の理性觀念は、斷じて之を經驗界に應用すべからざるものである。若し誤つて之を經驗界に應用して、神とか、宇宙とか、靈魂とか云ふものが客觀的に實在するものと考へたなら、それこそ大變な誤りである。之等は要するに調節原理であつて、組織原理ではない。吾々の悟性を調節總括して認識の向上を助けるのが、其本來の職分である。之に依つて、認識の本領を經驗外に押し擴めんとする時に、哲學は必らず迷論となり、詭辯と化す。從來の形而上學は、皆この弊に陷つた。

5　唯心論との關係

カントの認識論を一掴みに云へば、先づ斯んなものである。此說は前にも云ふ通り、唯物論者の認識論とは、全く反對の行き方をして居る。

唯物論に依れば、認識の根原は感官知覺である。カントの所謂る悟性概念なるものも、實は吾々の知覺經驗から生じたものである。然るにカントに依れば、認識の能動要素は悟性概念であつて、感官知覺ではない。感官知覺は單に認識の被動的內容を成すに過ぎぬ。此內容を統整して、一箇の連絡ある經驗を組立てるものは、總て悟性概念の働きである。悟性概念は經驗の所產にあらず、其決定條件である。

又、唯物論者に依れば、吾々に認識される世界は、卽ち事實在るが儘の世界である。處がカントは吾々に認識される世界は、單に現象としての世界に過ぎぬと云ふ。

之等のいづれより見るも、兩者の行き方は全く軸の兩端である。何處までも脊合せの形である。

處が、カントの認識論に依つて、差當り先づ大打擊を蒙るものは、唯物論でなくて實は唯心論である。蓋しカントに依れば、吾々の經驗の決定條件たる悟性概念なるものは、本來先天的に吾々の認識機關に具はつてゐるものであるが、其れが實際に活動して認識を生せしめるのは、唯だ經驗を通じてのみ行はれる。悟性概念は、經驗の彼岸に於て一切の意義を失墜する。所謂る本有觀念なるものは、茲に全く其根據を奪はれる譯である。

元來、唯心論者に依れば、人の本有觀念なるものは、云はゞ超自然界から派遣された證人の如きものである。本有觀念は固より超自然的對象に對して働き得るものである。否、其働きこそが實は本有觀念なるものゝ本來の職分である。

然るにカントの所謂る認識の先天的要素なるものは、唯だ經驗界にのみ働く。吾々の一切の經驗は此要素に依つて決定される。吾々は唯だ此要素のみに依りて、經驗對象の有らゆる必然的關係を認識する。單に之れだけの事が此要素の職分である。隨つて此要素は全然、超自然界に應用できぬものである。

そこでカントは斯う言明してゐる。『從來一切の純正唯心論者——古代希臘のエレア派より最近バークレイ監督に至る、有らゆる純正唯心論者の主張は、次の命題に包含される。曰く、感官及び經驗に依る一切の認識は、要するに總て幻影である。眞理は唯、純粹悟性と純粹理性との觀念內にある。處が予の觀念論の根本主張は、之と全く反對である。曰く、純粹悟性若しくは純粹理性に依る一切の認識は、要するに總て幻影である。眞理は唯、經驗の內に在る。』

然しカント説は勿論、唯物論とも衝突する。其衝突の第一は悟性概念に就てである。カントに依れば、悟性概念は先天的に吾々の思想機關に賦與されて居るものである。然るに唯物論者は、之も矢張り經驗の結果だと云ふ。

例へば、吾々は因果法概念を有してゐる。何事を考へるにも、吾々は之を原因結果の範疇に當嵌めて思考する。之は吾々の思想機關が、本來左樣にして物を考へるやうに出來てゐるからだとカントは云ふ。處が唯物論者から云へば、吾々の思想機關は決して本來左樣に出來て居るのでなくて、實は經驗の結果、次第にさう云ふ概念が吾々の思想機關内に造られて來たのである。

更らに分り易い實例を擧げて云へば、水を熱すれば蒸發する。吾々は決して有らゆる條件の下に有らゆる方法で水を熱して見た譯ではないが、兎にかく熱が蒸氣の原因で、蒸氣が熱の結果である事は、誤りのない眞理だと信じてゐる。

處が唯物論から云へば、之も詰りは吾々の知覺經驗から來たので、吾々は平素しば〳〵熱と蒸氣とが直接連續して現はれることを經驗する。此經驗を幾度びか重ねてゐる中に、吾々は熱を見れば直ちに蒸氣を聯想し、進んでは更らに之を豫期するやうになる。此豫期と云ふことが、結局熱と蒸氣とを必然的、因果的に結び付ける根本の原因である。

處がカントから云ふと、此説明には次の如き缺點がある。熱と蒸氣とは如何に屢々連續して現はれても、感官知覺から云へば熱は何處までも熱、蒸氣は何處までも蒸氣で、此二つの間には何等の關係がない。全く個々別々のものである。それを相互に關係せしめるには、唯物論者の主張する如き聯想の法則が必要である。然し此聯想の法則も實は因果法の一部分である。卽ち吾々の心理生活に適用された因果法に外ならぬ。此因果法の概念が、先天的か何うかと云ふ

事が當面の問題である。然るに唯物論者は、此概念を既定の事實と見て、それから出發して更らに因果法概念の發生經過を說明せんとしてゐる。卽ち問題を以て問題を解くの矛盾に陷つてゐる。

但しカントが因果法概念を先天的だと云ふのは決して、此熱と蒸氣の場合に於けるが如き具體的の因果法概念が、先天的に吾々の思想內に包含されて居るとゐふのではない。熱も蒸氣も、固より吾々の經驗對象である。唯、吾々が熱を知覺し蒸氣を知覺する時に、此二箇の知覺を因果的に結びつける心の能動性が先天的だと云ふまでの事である。

7 實在と現象

次に此兩說は、認識範圍の問題に關して衝突する。カントに依れば、吾々に認識される世界は、吾々に經驗される世界である。然るに吾々の經驗と云ふも

のは、外界の知覺寫象が時空及び悟性概念の先天性に把捉された時に、初めて行はれ得るものである。故に吾々の經驗は、悉く主觀の先天性に依つて着色されてゐる。吾々の認識は此經驗を對象とするものである。故に吾々の主觀の着色を離れた、赤裸々の實在と云ふものは、到底認識され得る筈がない。之に對して唯物論者は、吾々に認識される世界は、卽ち事物自體の世界だと主張する。

私は此論爭を一層明瞭ならしめんが爲に、今一度砂糖の例を繰返す。玆に一かけの砂糖がある。砂糖は甘い。白い。ザラ〴〵する。此甘いとか白いとか、ザラ〴〵するとか云ふ事は、吾々の感官に映じた知覺である。然し吾々は之等の知覺以外に尙、一箇の砂糖と云ふ總合概念を有して居る。此概念は吾々の主觀の產物かそれとも客觀的實在の眞の再現かと云ふ事が問題である。

カントから云へば、無論之は吾々の主觀の所產である。白いとか、甘いとか

云ふ知覺を生せしめるには、固より何か其れ相應の原因が外部に無くてはならぬ。けれども吾々の感官は、單に白いとか、甘いとか云ふ事を、支離滅裂に感知するに過ぎぬ。それらの知覺を總合して一箇の砂糖と云ふ概念を造るのは、全く吾々の思想機關の構造によるのである。吾々の思想機關が先天的に總合の範疇を具有してゐるからである。

處が唯物論者は斯う云ふ。成るほど白いとか、甘いとか云ふことは、支離滅裂の知覺であらう。然しそれらが常に纏つて同時に知覺されると云ふ事は、一方に砂糖と云ふ總合體が實在してゐるからではないかと。

唯物論とカント說とは、斯樣に徹頭徹尾衝突すべき運命を有してゐるが、然し又一方には非常に密接した方面もある。それは吾々の認識の對象たる世界が、一點の神秘、寸毫の自由を許さゞる純必然の、純機械的の世界だと云ふ一事で

ある。唯カントは此世界を單なる現象界として現實視し、唯物論者は現象界たると同時に又實在界として之を現實視する。いづれにしても、兩者の現實視する世界が、共に純必然の物質界たることは爭はれぬ。此意味に於て、カントも亦一種の唯物論者である。

8　墮落せるカント

カントは斯くの如く、吾々の知識は唯だ經驗界現象界にのみ働くべきもので、此現象を超越した物それ自體の世界は到底認識され得ぬものとした。彼の哲學は、此經驗の條件に關する研究、卽ち吾々の知識の限度の研究であつた。然るに此研究からして、彼はフト此限度を越えて見たい、卽ち不可知界を發見したいと云ふ事になつた。そして彼は此不可知界が現象界と全く異つた性質のもので、全然無時間、無空間、從つて無原因のものである事を知り得たと稱してゐ

る。

元來、カントは非常に信心深き家庭の中に敎育を受けた人で、其の基督敎的感情の結果として、彼は是非とも神と永生との可能なる世界を認識する事を要求した。然るに彼は最初、經驗の世界に於ては、神だの永生だのといふ者は全然無用であるとしたので、次には是非とも、其の神と永生との爲に、經驗以外の世界を見つけねばならぬことゝなつた。彼は如何にして、それを見つけ出したか。

彼の認識論に依れば、本體界は絕對に不可知である。處が彼は斯う考へた。本體界は不可知であるが、吾々が若し一箇の本體をつかまへ出せば、それで此不可知なる本體界も幾分か分つて來る筈である。彼は之を人の人格に於て發見した。卽ち人は誰でも現象であると同時に、又物それ自體である。人の純理性

は物それ自體である。感覺世界の一部としては、人は因果の鎖に縛られてゐるが、物それ自體としては自由である。故に人の行爲は感覺世界の諸原因に依つて規定せられずして、心中に存する道德法に依つて規定される。此道德法は純理性より發し、『汝は斯く爲さゝるを得ず』と云はずに、『汝は斯く爲すべし』と吾々に命ずるものである。『斯く爲すべし』と命ずるは、卽ち命ぜられた人に、斯く爲し得る力ある證據で、卽ち自由の存する證據である。

此道德法は元來が本體界から出たもので、其內容を決定する根據は純理性に存せねばならぬ。卽ちそれは感覺界の一切の關係を離れた、純形式的のものでなければならぬ。それでなければ直ぐに意志決定の根據たる原因結果の關係に踏込んで忽ち自由が失はれて了ふ譯である。玆に至つて、カントは其認識論の歸結を全く裏切つたものと云はなければならぬ。彼の道德論は神に對して向上

であつたかも知れぬが、理性の爲には却つて墮落であつた。

道德法は『感覺世界の一切の條件から獨立』したものでなければならぬと、彼は云ふ。然しながら、其んなものが實際に在り得ないことは、『眞理は唯、經驗の內に在る』と云ふ、先に擧げた彼れ自身の斷定が明瞭に之を裏書してゐるではないか。排氣鐘に依つて完全なる眞空を作らんとする時、吾々は既に感知することの出來ないほど稀薄になつた場合でも、猶そこに幾分かの空氣が殘存して居ると同じやうに、吾々は決して感覺世界の一切の條件から獨立した思想を抱く事は出來ぬ。

それに又道德法は元來既に感覺世界の條件を含有して居る。道德法は純粹意志それ自身の法則でなくして、他人と接觸した時に我意志を支配する法則である。他人を豫想する以上、既にそこに感覺世界の條件が存して居る筈ではないか

要するに、カントの道德法は當時の個人的從屬を原則とする封建制度に對する、一箇の反抗であつて、其人格主義はルソーの云ひ出した自由、平等、博愛と同じ相場のものである。斯くて、彼も亦當時の新興階級たるブルジョアの代辯者たる域を脫することが出來なかつた。

第四章　唯物史觀說の改造

1　用語のトンチンカン

カウツキーは其著『ベルンシュタインと社會民主主義綱領』の中で、ベルンシュタインの唯物史觀批評を攻擊し、彼れは徒らにマルクス、エンゲルスの用語を詮議立てするに止まり、肝腎の歷史的事實に對しては何等の考證を與へて居らぬ。之れはスコラスチークと申すもので、此んな事では迚も唯物史觀說の評價が出來るものでないと云つて、頻りに冷潮漫罵を浴びせかけてゐる。

私は多くの點に於て、ベルンシュタインの議論に承服し兼ねるものであるが、此點だけは妙に彼れに同情する氣になつた。それは必らずしも、唯物史觀に對する彼れの批評その者に共鳴した譯ではない。彼れの批評は他の多くの問題に

於けると同じく、唯物史觀に於ても亦極めて曖昧である、摑み所がない。私がベルンシュタインに共鳴したのは、彼れの批評の內容でなく、カウツキーが彼れを煩瑣的と冷笑した、その用語穿鑿的の態度その者である。

凡そマルクス說の中で、唯物史觀ほど其御祖師と御祖師と、御祖師と御信徒との間に用語のトンチンカンした學說はない。斯くの如き學說を批評するに、先づ用語の詮議立てをするは當然のことで、カウツキーほどの用語穿鑿家が(彼れは同じ書の中でベルンシュタインの有產者增大論を批評し、有產者とは資本家のことなりや、中流階級のことなりや、將たまた勞働者のことなりやと突込み、勞働者と雖も上衣と襯衣と多くは又家具とを有し、間々小屋と馬鈴薯畑とを有するものもありと皮肉つてゐる)、此點に限つて日頃の皮肉癖を超絕して、妙に大きく構へたのは何うしたものだ(と力んだ所で納簾に腕押しだが)。

2　生産技術と經濟的變化

それは扨て措き、唯物史觀說の謂ゆる『唯物』なる概念が先づ眉唾物だ。現代に於ける最も優秀なるマルクス論者の一人、ルイス・ブヂーンは、其著『マルクス說の理論的體系』に於て、マルクスの唯物史觀說は決して生産機關の技術的發達に於ける變化のみが、一切の歷史的事實を說明し得ると主張するものでないと力說して居る。彼れは言ふ。

『生産機關の技術的發達に於ける變化 (Changes in the technical developement of the means of production) は、通例、社會の經濟的關係の變化 (Changes in economical condition of the people) に伴ふものであるが、然し此二つは必然的に相伴ふものでなく、互に別個の變化を爲すものである。從つて生産技術の發達は社會の物質的關係の變化に對する主要の原因であるけれども、常に必ずさうであるとは限らない。社會の物質的關係に影響する他の原因もあり、又其物質的關係に何等の影響を及ぼさぬ生産技術の變化もある。そしてマルクス派の主張する所は、其物質的關係の變化が歷史の第一動力 (the prime mover of history) だと云ふのであつて、其變化の原因は問はない。生産技術の發達は間接に歷史の進行に影響するもので、只それが人の生活する物質的關係に變化を起させる程度に依つて影響を生ずるのである。』

然るにエンゲルスが其著『デューリング駁論』の中に述ぶる所に依ると、『唯物史觀說は、生産及び其れに次いでは生産物の分配が、總ての社會制度の根底であると云ふ命題から出發する』と云ふことになつてゐて、生産機關の技術的發達と經濟的關係との間に何等の區別を設けず、單に生産の一語でお茶を混してゐる。

3　生産機關の決定力

更らに御本尊のマルクスは何と言つてゐるか。彼れは經濟的（或は物質的）關係に代へて、生産關係(Produktionsverhaeltnisse)なる言葉を用ゐ、生産關係と生産機關（Produktionsmittel）とを明かに區別してゐる。此點はブヂーンの主張と一致するが、然しブヂーンが『マルクス派は決してそんな事を云つてゐない』と云つた斷言を裏切つて、マルクスは明かに生産機關の技術的發達が生産關係を決定し、更らに生産關係が他の一切生活上の過程を決定することを主張してゐる。ブヂーンに於て『必然的に相伴ふものでない』筈のものが、マルクスに於ては、必然的に而も嚴密に相伴はなければならぬのみでなく、又歴史の『第一動力』はブヂーンの主張する生産關係（或は物質的關係）でなくて、實に此生産機關の發達その者でなければならぬ、マルクスは其著『賃銀勞働と資本』に於て、實に次の如く言つてゐる。

『生産機關の性質に從つて、生産者相互の社會的關係も亦自然に異つて來る。即ち生産者が、互ひに其活動を交換し、又生産の共同行爲に關與する條件も異つて來る。銃砲の如き新武器の發明と共に、軍隊の内部組織は必然に全變した。個々人が軍隊を組織し、軍隊として働き得る關係、並びに各軍隊相互の關係も亦、これと共に一變した。

『斯くの如く、生産に於ける各個人相互の社會的關係、即ち社會的生産關係は、生産機關の、即ち生産力の變化發達と共に一變する。そして此生産關係の總和が、人の呼んで社會的關係即ち社會と稱するものを構成する。』

マルクスは茲では明かに、社會的關係の第一動力として、生産機關の技術的變化發達を强調してゐる。

4　生産力と生産關係

然るに、其の後に公にされたマルクスの『經濟學批評』の序文に載つてゐる有名な唯物史觀要領記で見ると、マルクスは生産機關の代はりに生産力（Produktivkraefte）或は物質的生産力（materielle Produktivkraefte）なる言葉を用ゐ、此生産力が生産關係を決定することを暗示してゐるが、然し歴史の決定條件としては寧ろ生産關係の方をヨリ多く强調してゐる。卽ち左の如し。

『人間が社會的に其生活資料を生産する時、或種の必然的なる、自己の意志より獨立したる關係を作る。其の關係は卽ち其社會に於ける物質的生産力の發達程度に相應する生産關係である。此の生産關係の總和が社會の經濟的構造をなすもので法律的及び政治的の上部構造を作り上げる眞實の基礎であり、又之に相應する或種の社會的自覺を生せしめるものである。此の物覺的生活資料の産

出方法が、社會的、政治的、及び精神的の一般生活上の過程を決定する。人の意識が人の生活を決定するのではなく、其の反對に、人の社會生活が人の意識を決定するのである』（堺氏の譯文借用）。先きに引抄した『賃銀勞働と資本』の一節の中で、マルクスは『生産機關の、卽ち生産力の變化發達』と云つてゐる以上、『生産機關』に代へて『生産力』なる言葉を用ゐるやうになつたことに不都合はないやうなものゝ、前に屢々繰返された生産機關と云ふ言葉は茲には一言も出て來ず、加ふるに其生産關機の代用語たる生産力に決定される『生産關係』（或は生産方法）の方が、歴史の決定原因として非常に重きを置かれるやうになつて來た。

之れは單に便宜上の用語變更とのみは見られない。私は此間に幾分のゴマカシが潛んでゐるのではないかと考へる。元來『生産機關卽ち生産力』と解した

ことが、マルクスとしては極めて不用意な言ひ現しであつて、生産機關の發達と生産力の發達とは、全然別物ではないが、さりとて又た全然同一の内容を示すものでもない。生産機關の發達は、生産力の發達の唯一の原因ではない。

マルクスは此事を明かに感づいて來た。そこで彼れは、生産機關の變化發達が社會的生産關係の決定原因であると云ふ言現しの不合理を覺り、生産機關に代へて生産力を持出したのでは無からうか。後に公にされた『資本論』第一卷で見ると、マルクスは明かに生産力が『種々樣々の條件』に決定されることを認め、それらの條件の主なるものとして、『勞働者の熟練の平均程度、科學及び其工藝的應用の發達、生産行程の社會的結合、生産機關の範圍及能率、及び種々なる自然關係』等を數へてゐる。即ち生産機關の發達程度は生産力の決定條件中の一を成すに過ぎない。隨つて生産力の發達程度が歴史の進化を決定すると

云ふ時には、單に生産機關のみでなく、少なくとも玆に擧げた數個の條件を計算に入れなくてはならぬ。

然るに生産力の決定條件たる之れら數個の條件の中には、既に生産力に決定せらるべき筈の社會的生産關係の一部を成すものがある。例へば『生産行程の社會的結合』(分業、協業等の如き)が即ちそれである。さあ此うなつて見ると、鷄が先きか卵が先きか分らなくなる。そこでマルクスは、一面生産力が生産關係を決定すると見ながら、他方に社會進化の決定條件としては、生産力を通り越して寧ろ生産關係の方に重きを置くやうな言ひ方をするやうになり、更らにエングルスになると、生産關係の外に交換及び分配の二項目を追加し、生産の中に生殖まで引ッ括めるやうになつたのである。

此う考へて見ると、ブヂーンが『生産技術の發達は社會の物質的關係の變化

に對する主要の原因ではあるけれども、常に必ずさうであるとは限らない。社會の物質的關係に影響する他の原因もあり、又その物質的關係に何等の影響を及ぼさぬ生産技術の變化もある』と云つたことも、成るほどと點頭かれる。只彼れは不幸にして、マルクスに對する批判的態度を缺いてゐたので、此見地を以て直ちにマルクス自身の見地と一致するものと早合點した。

5　改造の第一點

以上說く所に依つて、マルクスの唯物史觀說なるものが、頗る混亂錯綜した命題であることが分る。餘程の無批判な御信心家でなくては、之れを其まゝ受け入れることは出來ぬ筈である。

斯く言へばとて、私は決して唯物史觀說を輕蔑するものではない。唯物史觀說は玉石混交である。經濟或は衣食住が一切社會生活の基礎だなどと云ふ雜薄

な見地から如何に此の學說の應用を試みたからとて、此學說の完成その者には何程の效果もない。應用は末である。原理その者の淨化確立が本でなくてはならぬ。

私は唯物史觀說改造の一案として、試みに此んな事を考へた。唯物史觀說は先づ『經濟』『經濟事情』、『物質的條件』、『生産關係』、『生産方法』、『社會的生活』などの混亂した用語を一掃して、『生産力』の變化發達を歷史の『第一動力』としなければならぬ。動力は原因の意にあらず、原因は單一でなくて多數である。勞働の熟練程度も、科學や工藝の發達も、道德も、分業も、協業も、生産機關も、地理も、氣候も、人種的特徵も、皆な伏能的に社會進化の決定原因と見ることが出來る。

然し之等の原因は、常に必らず社會進化を決定するとは限らぬ。之らが事實

上社會進化を決定するには、先づ生產力を動かさなくてはならぬ。卽ち以上擧ぐる如き多數の伏能的原因は、それが生產力に變化を與へた時に、始めて歷史的變化の實際の原因となるのである。隨つて生產力その者は原因でなく、他の伏能的諸原因を實際的原因たらしむる唯一の制限的條件である。此言ひ方は恰も、勞働は商品價値の唯一の原因だが、使用價値は商品價値の缺くべからざる條件だと云ふのと善く似てゐる。

以上はホンノ暗示に過ぎぬが、此んな風に考へると、唯物史觀說も餘程無理が少なくなつて來る。私は追つて又、別の方面から此學說の改造案を提出して見るつもりである。

第五章　勞働の價値說及び剩餘價値說

1. マルクス經濟論の出發點

マルクス經濟論の目的とする所は、今日廣く行はるゝ資本家的生產方法であつて、一般生產行程の根底に存する自然法の研究ではない。蓋し斯くの如き自然法は單に、經濟生活の技術的方面（卽ち人間對自然の關係）にのみ働き、物理化學の取扱ふべき問題である。經濟學は社會科學の一分科であつて、經濟生活の社會的方面（卽ち自然を對象としての人間對人間の關係）を研究する科學でなければならぬ。そして經濟生活の此社會的方面を最も標本的に、最も完全

に表現したものは、即ち近世資本主義の生産方法である。

故に經濟學の研究は、先づ此の資本家的生産方法の解剖に始まらなければならぬ。

2　財貨と商品

資本家的生産は商品生産の、最後の且つ最も著しき歴史的形體であつて、其特徴は單なる財貨の生産を目的とせず、商品の生産を目的とすることである。換言すれば、資本家的生産方法に於ては、生産者は自己の使用（或は消費）を目的とせず、他人に對する販賣（或は交換）を目的として物を生産する。

そして此生産物が一度び他人の手に渡つた後、その他人が果して之を使用するか何うか、又た使用するとすれば如何なる形式に於て之れを使用するか。それは生産者として少しも顧慮する必要はない。彼れは只だ自己の造つた（嚴密

には造らした）物を他人に販賣すれば善いのである。

即ち生産者は自分の使用の爲に財貨を生産せず、只だ市場の爲に商品を生産するのである。さればマルクスが其不朽の大著『資本論』の冒頭に言つたやうに、『資本家的生産方法の弘く行はれる社會の富は、商品の尨大なる集積として表面に現はれ、個々の商品は即ち其の富の單位形體を成す。故に我々の研究は、商品の解剖から始まる。』

3　使用價値と交換價値

今、此商品の性質を調べて見るに、商品は元來これを使用する人の何等かの欲求を充たすと云ふ性質、即ち使用價値を有してゐる。然しながら使用價値は決して、商品にのみ限られた性質ではない。我々は空氣を使用し、日光を使用し、水を使用する。即ち空氣、日光、水は我々に取つて使用價値である。然し

其れらは一般に商品ではない、單なる自然物である。

されば使用價値を有するといふことは、決して商品の特徴ではない。使用價値として見れば、商品は卽ち財貨である。財貨が商品となり得る爲には、使用價値以外に尙ほ今一つ、交換に役立つといふ性質、卽ち交換價値の附け加へを要するのである。

然し商品は何ゆえ交換されるかと云へば、矢張り使用價値が其根柢を爲してゐるからである。卽ち財貨であるからである。勿論、商品の所有者に取つては、使用價値の有無は問題ではない。彼等は只だそれを交換しさへすれば善いのである。(資本家制度のもとに於て、その交換の目的が剩餘價値の產出若しくは實現に在ることは、後に說く)。然し社會的に必要なる物件でなくては交換される筈がない。故に交換價値の成立し得る爲には、其前に先づ使用價値の成立を必

要とする。使用價値の無い、只だ交換價値のみの商品といふものは考へられぬ。

さればと云つて、使用價値と交換價値とは決して同じ物ではない。此兩者は寧ろ互ひに極力反撥し合ふ性質を有してゐる。物は使用價値としてそれを使用せざる人の手中に於てのみ交換價値である。それが使用價値として頭を擡げる時に、交換價値は反對に陰を潛める。物を商品たらしめるものは、其物の交換價値である。故に其物は只だ交換の爲の存在を續けてゐる間のみ商品なので、一度び消費の爲の存在に入るや否や、頓に其の商品性を失墜する。然るに使用價値は一方から云ふと、物の自然的性質それ自體、存在それ自體に固有の屬性であつて、毫も其物の生產の社會的形體如何には關はらぬ。如何なる方法で生產されても、其物は常に同一の使用價値を維持する。

使用價値は又他方に於て、物とそれを使用する人との間に於ける純主觀的關

係である。山海の珍味よりもコップに盛つた冷水一杯の方が、遙かに有難いことがある。この場合、冷水一杯の使用價値は山海の珍味のそれよりも遙かに大きい譯であるが、それは畢竟、使用價値の大小が冷水や山海の珍味その者の客觀的性質に依つて決定されないで、それを享樂する人の主觀的狀態に依つて決定されるからである。

4　交換價値は社會的關係

使用價値は交換價値を制限する基礎的條件である。使用價値を離れて交換價値はなく、財貨を離れて商品はない。然しながら使用價値は決して交換價値の原因ではない。交換價値は使用價値といふ純粹の物理的、心理的關係の上に結晶した一定の社會關係である。

故にマルクスは言ふ。『富の社會的形體は如何やうにもあれ、使用價値は常に、

此形體と直接には無關係なる獨立の內容を有してゐる。我々は小麥を口にして其造り主が誰であるか、ロシヤの農奴であるか、フランスの小農であるか、或は又イギリスの農業資本家であるかを味ひわけることは出來ぬ。使用價値は社會的欲求の對象として存在し、隨つて又た社會的聯絡の中に存在して居るけれども、而かも何等社會的生產關係を表現しない。今、此使用價値としての商品の一例としてダイヤモンドを取る。我々はダイヤモンドに於いて、それが商品であることを識別することは出來ぬ。美術用にせよ、工業用にせよ、遊女の胸を飾る場合にせよ、硝子切りの手に握られて居る場合にせよ、ダイヤモンドが使用價値として使用される限りはそれは單にダイヤモンドであつて商品ではない。使用價値たることは商品の成立に必要なる條件のやうに見えるが、然し商品たることは使用價値の成立には無關係であるかの觀がある。斯くの如く經濟

的形體に無關係なる使用價値、卽ち單に使用價値としての使用價値は、全く經濟學の研究外に屬するもので、使用價値は經濟的形體を成す場合にのみ、經濟學の研究範圍に入り來たる。使用價値は直接には、一定の社會的關係の、卽ち交換價値の依つて以て自己を表現する物質的基礎である。』

社會の富は曾て、單なる財貨の（卽ち使用價値の）集積であつた時代もある。然るに資本家的生産方法の行はるゝ現代に於ては、富は純然たる商品の（卽ち交換價値の）累積として表面に現はれる。

5　共通の第三者

斯くの如く、商品は直接には只だ交換（或は賣買）の爲めにのみ存するものであるが、商品の交換に於て、我々の先づ氣付くことは、それが常に一定の數量比例に於て行はれることである。この數量比例、卽ち一の商品と他の商品との交換比例は卽ち交換價値である。この比例は固より時と場處とに從つて絶えず變動するが、然し一定の時、一定の場處に於ては、常に一定してゐる。

今茲に二種の商品、帽子と牛肉とを例に取る。此の二商品の交換比例は如何樣にもあれ、それは常に或分量の帽子を或分量の牛肉と等しからしむる方程式、例へば1ダース帽子＝a斤牛肉を以て之れを示すことが出來る。此方程式は抑も何を意味するか。曰く同じ大さの或る共通物が二種の異れる物件卽ち一ダースの帽子とa斤の牛肉との中に存在すると云ふことである。故に此兩者は、それ自體に於て帽子でもなく、又牛肉でもなき、或第三者に等しい。隨つて此兩者のそれ〴〵は、それが交換價値である限り、此の第三者に約元し得なくてはならぬ。

マルクスは此關係を示すに、幾何學上の例を引いてゐる。彼れは言ふ。『我々

は總ての直線形の面積を決定する爲に、それらを三角形に約解する。そして又我々は、此三角形それ自體を、其目に見える形とは全く異れる言現しに、即ち其高さと底邊との積の二分の一に約元する。之と同様に諸商品の諸々の交換價値も亦、それらに依つて其大小多寡を代表される所の、一箇の共通物に約元することが出來る。』

6　交換價値と價値

此共通物は商品の幾何學的、物理化學的、若しくは其他の自然的性質であることは出來ぬ。商品の有形體性質は一般に只、それが商品を効用物たらしめ、隨つて又使用價値たらしむる範圍内に於てのみ問題となる。然るに商品の交換關係を明かに特徴づけるものは、正に其使用價値を抽象し去ることである。

そこで若し、商品から其一切の使用價値を取除いて了ふと、後には唯だ一つ

の性質、即ち勞働生産物たる性質が殘る。然し勞働生産物と云つても、我々は既に其使用價値を取除いて了つたのであるから、隨つて使用價値の成立に必要なる一切の物質的成分や形體も亦同時に除去されたものと見なければならぬ。されば勞働生産物はもはや帽子でもなく、牛肉でもなく、机でもなく、家屋でもなく、其他一切の効用物でもない。其使用價値を組成する一切の物質的性質は、既に全く抹殺し去られたのである。

斯くの如く一切の物質的性質を抹殺し去られた勞働生産物はまた最早製帽勞働の所産でもなく、牧牛勞働の所産でもなく、指物勞働の所産でもなく、建築勞働の所産でもなく、其他一切の具體的勞働の所産でもない。勞働生産物の効用性が消滅すると同時に、其勞働生産物に依つて表現せらるゝ種々なる勞働の効用性も亦消滅する。勞働の効用的性質が消滅すると云ふことは、即ち勞働に

附隨する一切の具體的形體が消滅すると云ふことである。かくて各種の勞働はもはや悉く、平等無差別なる人間勞働に約元されたことになる。

さて然らば、斯くの如く一切の形體的性質を篩ひ落された後の勞働生産物は、果たして如何なるものか。勞働生産物から其一切の具體的性質を取り除いてしまへば、後に殘るものは只だ『一樣の空幻的現實性』即ち一切の具體的性質を離れた、抽象的意味での人間勞働の結晶のみである。此、一切の勞働生産物に共通なる、社會的本質の結晶を稱して、我々は之れを價値即ち「商品價値」と云ふ。

此の價値が即ち私の曩さに指摘した、帽子と牛肉とに、隨つて又すべての商品に、共通の第三者である。交換價値は畢竟、かくの如き共通物が種々なる數量比例に於て、樣々の商品に現はれた具體的形體に外ならぬ。哲學的に云へば、價値は實體で交換價値は即ち其種々なる現象である。

されば財貨或は使用價値は、抽象的意味での人間勞働を體現して居ればこそ價値を有するので、人間勞働の結果でない財貨には固より價値は無い。

7　社會的に必要なる勞働

然らば此財貨の價値の大さは、如何にして之れを測るか、曰く、使用價値の中に含まるゝ價値形成要素即ち勞働の分量に依つて之れを測る。そして各勞働の分量は、勞働の繼續時の長短に依つて測られ、勞働時はまた一定の時單位、例へば時間、日等を目安として之れを測る。

斯く言へば、論者或は反對して言ふであらう。若し商品の價値が斯くの如く其生産中に消費された勞働の分量に依つて定まるとすれば、人が怠惰であればある程、或は不熟練であればある程、其生産した商品はそれだけ益々價値が多くなければならぬ。なぜならば、それだけ益々多くの時を其生産に費すからで

あると。マルクスは此反對論に答へて言ふ。

『然しながら價値の本質を形成する勞働は、平等なる人間勞働である。同一なる人間勞働力の消費である。商品界の諸價値として顯現する、社會の總勞働力は、元來無數の個人的勞働力から成り立つてゐるが、茲では其れは一樣無差別なる人間勞働力として働く。そして之等の個人的勞働力の夫々は、それが社會の平均勞働力たる性質を具備し、又た斯の如き社會的の平均勞働力として働く限り、隨つて又、一商品の生産に於て單に平均的に必要なる、若しくは社會的に必要なる勞働時のみを必要とする限り、いづれも皆な同一なる人間勞働力である。そして其社會的に必要なる勞働時とは、一定の時代に於て社會的に標準を成す所の生産諸條件を以てして、又其時代に於ける勞働の社會的平均熟練程度、及び其社會的平均强度を以てして、何等かの使用價値を産出するに必要な

る勞働時の謂である。』

マルクスは更らに之れを例證して言ふ。『イギリスに蒸汽織機を使用し始めたる後、一定量の紡絲を織物たらしむるに、多分從來の勞働の半ばを以て事足るやうになつた。他方に於て、イギリスの手織工は、此同じ仕事に對して實際、從來通りの勞働時を要してゐる。それにも拘はらず、彼れ自身の勞働一時間の生産物は、今や社會的勞働半時間を代表するに過ぎぬ。隨つて其從來の價値の半ばに低落したことになる。』

8　價値と生産力

斯くの如く、一の使用價値或は財貨の價値の大さを決定するものは、社會的に必要なる勞働の分量、若しくは其使用價値或は財貨の生産上社會的に必要なる勞働時に外ならぬ。されば同じ大さの勞働量を含む所の、或は同じ勞働時に

於て生産され得る所の諸商品は皆な同じ大さの價値を有す。マルクスの言葉を借りて言へば、『一商品の價値が他商品の價値に對して有する關係は、前者の生産に必要なる勞働時が、後者の生産に必要なる勞働時に對して有する關係に等しい。』

されば商品の價値の大さは、其商品の生産に要する勞働時が不變なる場合には、永久に不變である。之れと反對に、此勞働の生産力に變動ある毎に、それと共に又變動するものである。所が此勞働の生産力は絶えず變動してゐる。そしてマルクスは其變動の主なる決定原因として、左の諸條件を數へてゐる。

勞働者の熟練の平均程度、科學及び其工藝的應用の發達程度、生産行程の社會的結合、生産機關の範圍及能率、並びに諸種の自然關係。

マルクスは之れを更らに次ぎの如く説明してゐる。

『例へば同じ分量の勞働が、豐年には八ブシエルの小麥となりて現はれ、凶年には僅かに四ブシエルの小麥にしか體現しない。又同じ分量の勞働が、豐坑に於ては瘠坑に於けるよりもヨリ多くの金屬を産出する。ダイヤモンドは地表に於て稀有のものである。隨て其發見には平均して多大の勞働時を要する。されば、ダイヤモンドは僅少の嵩に於て多量の勞働を代表してゐる。ヤコーブは金が曾て其充分の價値を支拂はれたることありやを疑つてゐる。ダイヤモンドに至つては尚更らである。エシユエーゲに依れば、一八二三年に於てブラジルの諸ダイヤモンド坑の過去十八年間の採掘總高は同國に於ける砂糖及び珈琲栽培事業の一年半の平均生産物の價格にも達しなかつた。而も前者は一層多くの勞働を、隨つて又一層多くの價値を代表してゐたのである。

『一層豐良なるダイヤモンド坑に於ては、同じ分量の勞働は一層多くのダイヤ

モンドに體現し、隨つてダイヤモンドの價値は、低落するであらう。又若し僅少の勞働を以て、炭素をダイヤモンド化することが出來るとすれば、ダイヤモンドの價値は煉瓦以下に低落する場合もあらう。一般に勞働の生産力が大なるに從つて、物品の生産に要する勞働時は益々小さく、其物品に結晶する勞働量は益々小さく、かくて其價値は益々小さい。之れに反して、勞働生産力が小さければ小さき程、物品の生産に要する勞働時は益々大きく、其價値は隨つて益々大きい。されば一商品の價値の大さは、其體現する勞働の分量に正比例して、又其體現する勞働の生産力に逆比例して變動する。』

9　勞働力は商品

以上說く如く、商品の價値は、其生産に（嚴密には再生産に）費す社會的に必要なる勞働の分量に依つて定まる。然るに此原則は單に、人間勞働の生産物

たる一般商品に當嵌るのみならず、又それらの商品の源泉たる特殊の商品、即ち人間の働く力、換言すれば勞働者の勞働力に對しても同樣に當嵌るのである。

勞働者の勞働力を商品と視ることは、かの空理に立脚する人道家（姉崎博士の如き）や、階級的利害のために只管ら社會の眞相を隱蔽せんとする資本家、權力者（ウキルソン、澁澤男爵、床次内相の如き）に取つては甚だ好ましからぬことであらう。然しながら好ましくても、好ましくなくても、事實は何處までも事實として尊重しなければならぬ。

勞働者は一定時の間、自分の勞働力を資本家に提供し、資本家は又、勞働者に一定の賃銀を支拂つて之れを自分の工場内で生産的に消費する。安ければ買ふし、高ければ買はぬ。高ければ賣るし、安ければ賣らぬ、或は一層高く買ふ所に賣る。一方は成るべく安く買はんとし、一方は成るべく高く賣らんとする。

他の一切の商品が人間勞働の所產である如く、勞働力も亦人間勞働の產物である。他の一切の商品の價値が其生產に要する社會的勞働の分量に依つて定まる如く、勞働力の價値も亦、其生產に消費する社會的勞働量に依つて定まる。他の一切の商品が其所有者に取つて使用價値でないと同じく、勞働力も亦其所有者たる勞働者に取つて使用價値でない。他の一切の商品が他人の使用の爲に存在すると同じく、勞働力も亦他人の使用の爲に存在する。

之れらの何づれより見るも、勞働力は實に一個の立派な商品である。勞働力と他の一般商品との間には、其の商品たる意味に於て、微塵の差異もないのである。

10　勞働力の商品と資本主義

勞働者の勞働力が一商品として交換され消費されることは、單に近世資本家

制度の特產であるばかりでなく、又實に其の出發點たりしものである。近世資本家制度以前の如何なる社會に於ても、人間の勞働力は未だ曾て一個の獨立した商品と見做されたことはない。人間の勞働力は人間の身體の一部分である。人の身體と勞働力とは、迚も之を分離して考へることは出來ぬ。自由人としては人間の勞働力は彼れ自身の所有物である。彼れは自由に思ふ儘に、之れを處分することが出來る。之れに反して奴隷となれば、彼れの勞働力はもはや彼れ自身のものではない。彼れの身體が主人の所有物であると同じく、彼れの勞働力も亦主人の所有物である。いづれにしても、人間の勞働力は其身體と別々に考へることは出來ぬ。人の容貌が人の身體の一部であると同じく、人の勞働力も亦其身體の一部である。近世資本家制度以前に於ける勞働力は、正に斯くの如きものであつた。

然るに資本家制度の出現と共に、人間の勞働力は全く其身體から抽象されてしまつた。人の身體と人の勞働力とは、全く個々別々の存在なるかの觀を呈して來た。そして此單に勞働力としての勞働力、即ち斯くの如く抽象化された勞働力は、又全く一個の獨立した商品として公然と一般的に賣買されるやうになつた。此一種特別なる商品の出現が即ち近世資本家制度の歴史的原因であり又結果である。

11　勞働力の價値

資本家は勞働者から其勞働力を買取り、之れを自分の工場に於て生産的に消費し、其結果として一定の生産物を得る。

勞働力の價値は、他の一般商品の價値と同じく、其生産に要する社會的に必要なる勞働の分量に依つて定まる。然るに勞働力と云ふものは、事實に於て勞

働者の生存と別つことの出來ぬものであるから、勞働力の生産に要する勞働量とは、畢竟勞働者の生活を産出する爲に要する勞働量でなければならぬ。勞働者の生活は、生活資料の消費に依つて産出される。故に一日の勞働力の價値は、結局勞働者の一日の生存を維持するに必要なる生活資料の價値と同一に歸する。そこで資本家は勞働者から其勞働力を買ひ取り、其代價として、此生活資料の價値を勞働者に支拂ふのである。此價値の貨幣に現はれたものが即ち賃銀である。

勞働者の勞働力は、一旦資本家の手に渡つて了へば、もはや勞働者のものではない。資本家のものである。資本家は最初の雇傭契約に違反せぬ限り、之れを如何やうにも處分することが出來る。

12　利潤の出處

そこで資本家は自分の最も適當と思考する方法で、之れを勞働として消費する。其結果として資本家は一定の生産物を得る。此生産物の價値は、資本家が

● 勞働者に支拂ふ賃銀と、消費した生産機關部分の價値との總和、即ち生産費よりも大きくなくてはならぬ。資本家は道樂に生産事業を營む譯ではない。又其根本の動機に於ては、國家の爲とか人道の爲とか云ふ、謂ゆる高尚な目的の爲に生産を行ふものではない。資本家が生産事業を營む第一動機は營利である。即ち生産費以上の價値を獲得することである。

然らば此生産費以上の價値、即ち資本家の利潤は、果して何處より生ずるか。商品の流通行程よりか。それとも又その生産行程よりか。換言すれば、資本家は高いものを安く買ひ、安いものを高く賣ることに依つて利潤を得るのか。或は資本家の生産物は流通行程に入る前に、既に生産物として利潤を含んでゐるのか。

13 利潤は勞働の生産的消費より生ず

高いものを安く買ひ、安いものを高く賣るといふ事は、曩に述べた價値の本則と矛盾する。なぜならば、商品相互の交換は、原則としては、唯だ同等の價値の交換としてのみ行はれるからである。

そこで利潤の出處は、結局これを生産行程の中に求めなければならぬ。然し生産行程の中と云つても、生産機關その者は決して利潤の原因にはならぬ。生産機關は唯自己の有する價値を其まゝ生産物に移轉するに過ぎぬからである。

そこで利潤の原因は、結局勞働力の中に之れを求めるの外はない。

資本家は勞働者に賃銀を支拂つて、其勞働力を買取る。即ち價値を以て價値に換へるのである。原則としては、同一の價値を以て同一の價値を購ふのであ

る。故に資本家と勞働者との取引は、資本家と他の資本家との取引、若くは資本家と他の一般消費者との取引と同じく、原則としては寸毫も不正な點はない。資本家は決して勞働者から、より大きな價値をより小さな價値で買ふ譯でない。勞働者が資本家に賣渡す勞働力は、原則としては、資本家が其代價として勞働者に支拂ふ價値以上の價値を含まぬ。

故に價値として商品として見れば、勞働力は決して利潤の原因とならぬ。勞働力が利潤を生ずるのは、商品としての勞働力でなく、既に資本家の手に渡つた後の使用價値としての勞働力である。資本家は勞働力を勞働として使用する。勞働は卽ち勞働力の使用價値體である。それは恰も石炭といふ商品の使用價値體が熱であるのと同じ理屈である。

然るに勞働力の使用價値體としての勞働の分量は、勞働力の生產に費された

勞働の分量よりも常に大きい。勞働力の價値は、此小さい方の勞働量に依つて定まり、其の使用價値は此の大きい方の勞働量となつて現はれる。此の大小勞働量の差額が、卽ち資本家の贏得する利潤の基礎體であつて、マルクスは之れを剩餘價値と呼んだ。產業利潤、利子、地代等は、此の剩餘價値の樣々の顯現體に過ぎぬ。

14　剩餘價値と可變資本

以上の筋道を簡單な數字で說明すると、資本家は先づ80の價値を有する生產機關を準備し、更に20の價値を賃銀として幾人かの勞働者を雇傭し、それらの勞働者から一定時の間勞働力を受取つて、之を右の生產機關と共に消費する。さうすると其結果として120の價値を有する生產物が生ずる。卽ち20の剩餘價値を得る譯である。此剩餘價値は、前記の生產機關卽ち80から生じたものでは

ない。80は80として其まゝ生産物に移轉する。

然るに20と云ふ賃銀は、單に20として生産物に移轉するのみならず、その上更に他の新らしき20を産出する。即ち勞働者が資本家に引渡す勞働力の生産に要する勞働量は本來20であるが、其勞働力が使用價値として消費されると、今度は40として現はれるのである。

そこでマルクスは右の80（即ち生産機關に相當する價値）を『不變資本』と呼び、賃銀に相當する20を『可變資本』と呼んだ。利潤の發生は全く此可變資本の力に依るのである。

15　必要勞働と剩餘勞働

今、説明の混雜を避くる爲に、資本家に雇はれる勞働者の數を單に一人と假定する。資本家は此勞働者の勞働力を十時間消費し其代價として賃銀20を支拂

ふ。然るに此勞働力は實際之れを使用して見ると、既に五時間にして右の20を回收し、更に殘りの五時間にて過剩の20を産出する。

されば勞働者から云へば、前の五時間は自分が資本家から得た賃銀を回收する爲に働かねばならぬものであるが、後の五時間は實は何うでも良いのである。そこでマルクスは右の働かねばならぬ方の勞働を『必要勞働』と言ひ、何うでも良い勞働を『剩餘勞働』と呼んだ。必要勞働を代表する價値は『必要價値』である。剩餘勞働を代表する價値は即ち『剩餘價値』である。剩餘價値は勞働者から云へば無くもがなのものであるが、資本家から云へば、是非ともなくてならぬものである。剩餘價値は資本の原因であり、又その唯一の目的である。

16　勞働時間と賃金と剩餘價値

剩餘價値の大小は先づ勞働時間の長短によつて定まる。即ち勞働時間が長け

れば長い程剰餘價値は大きい。前記の十時間を十二時間とすれば、他の事情に變化なき限り剰餘勞働時間は五時間から七時間に伸びる。

次に剰餘價値の大小は又、必要價値の大小と正反對に伸縮する。例へば勞働者の生活標準が向上して、賃銀が增騰し、必要勞働時間が五時間から六時間に伸びたとすれば、他の事情に變化なき限り剰餘時間は五時間から四時間に縮小する。それと反對に、勞働の生產力が一般に向上したる結果、賃銀が低落し、必要勞働時間が五時間から四時間に縮小したとすれば、剰餘勞働時間は反對に五時間から六時間に增伸する。

これらの何づれより見るも、資本家と勞働者との利害は絕對に衝突する。資本と勞働とは、其の性質上、互ひに極力爭ふべき筈のものである。

17　流通行程は剰餘價値を實現す

斯くの如く、剰餘價値は全く生產行程の中に於て產出せらるゝものであるが、生產物は決して生產行程を出ると同時に消費者の手に渡る譯ではない。生產物はその最初の生產行程を出發して、最後の目的點卽ち消費者の手に達するまでには、流通行程を經過しなければならぬ。生產物に含まれる剰餘價値は、其生產物と共に生產行程內で產出されたものであるが、それが具體的に利潤として實現されるのは、生產物が右の流通行程を經過してゐる間の出來事である。剰餘價値は生產物が商品として此流通行程を經過してゐる間に、徐々にキレ〳〵に實現されてゆくので、最初生產者の手を離れた時、全部實現されて了ふものではない。

流通行程は單に剰餘價値を利潤（及び利子、地代）として實現するに止まる。其實現せらるゝ剰餘價値は既に生產行程に於て產出されてゐるので、社會全體

に就て云へば、流通行程に於て實現される利潤の總和は常に、生產行程に於て產出される剩餘價値の總和に等しいのである。

18　マルクス批評家の特徵

マルクスの價値說及び剩餘價値說の大要は以上紹介する通りである。之に對してマルクス批評家側からいろ〳〵の批評が提出されてゐるが、其大多數は一方に於て經濟學者としてのマルクスの偉大を嘆賞し、他方に於てその價値說及剩餘價値說を單なる獨斷、若しくは時勢に適せぬ陳腐の學說として擯斥することに一致してゐる。換言すれば、マルクスは偉い學者だが、其學說はつまらぬものだと云ふのである。

マルクス批評家のうちで、マルクスの經濟學說を最も廣く包括的に批評し、且つ一般批評家の間で此方面の最大權威を以て目されてゐる者は、オーストリヤの經濟學者ベーム・バヱルクである。そこで私は、茲では主として此バヱルクの批評を紹介し、更らにそれをマルクス說の立場から再批評して見る。他の批評家の立場は、大抵このバヱルクの大きな立場の中に含まれて了ふのである。

19　一般的效用と價値

バヱルクはマルクス以前に於ける勞働價値說の主張者たるスミス、リカード、ロドベルトウス等の所論を一瞥して、彼等は何づれも勞働價値說を假定したに過ぎず、毫もそれを立證しやうと試みなかつた、之れに反して、マルクスは單に此說を主張したばかりでなく、又それを立證しやうと努めた、此點に於てマルクスは確かに其先驅者等に對して一頭地を拔いてゐると言つて居る。

然し彼れに依れば、マルクスの與へた說明その者には感服できぬ點が多々ある。例へばマルクスは、商品の効用性が交換價値に及ぼす影響を無視してゐる。

マルクスは、『使用價値としては、諸商品は第一に異れる性質のものである交換價値としては、其れは只異れる分量たり得るに過ぎぬ、隨て寸分も使用價値をも含まぬ』と云つて、商品の使用價値を悉く抽象し去つた。また商品生産勞働の種々なる効用的形體をも抽象し去つた。そして其れらの抽象の最後に殘る一般的人間勞働の中に、價値の本體を捕捉しやうと努めた。

之に對してバエルクは次の如く言つてゐる。『勞働と効用との差異は何處にあるか。成るほど交換される物品の特殊の効用性が、商品の交換比例に關係しないことは事實である。然し諸商品の一般的効用性は抽象し去られない。それは寧ろ總ての商品に通じて存續してゐる。商品が食物として使用されるか、それとも衣服、住屋いづれのものとして使用されるかは、敢て關はらない。然しそれが何かに使用されると云ふこと、一般的効用を有してゐると云ふことは、無

視する事ができぬ。然らば何故、交換價値の原因及尺度として効用を排斥するのであるか。何故、それを抽象し去るのであるか。マルクスは勞働に關して、商品に含まるゝ勞働の特殊の種類を抽象し去ることを餘儀なくされた。斯くて總ての商品に通じて殘存するものは、一般的勞働、抽象的意味での勞働といふことになつた。それと同じ意味で、總ての商品に通じて一般的効用性が、抽象的意味での効用性が殘存することにならねばならぬ。然るにマルクスは何故、効用性に對して勞働を爾かく偏重するのであるか。勞働と効用との間に斯くの如き區別立てをなし、勞働を價値の唯一の原因及び尺度となして、此現象に對する一切の影響力を効用に與へぬ理由如何。』

我々は此質問に對して、先づ資本家的生産の目的から調べて掛らう。何人も知る如く商品は交換される前に、既に生産されてゐる。然し商品は、交換と交

換に依つて實現される價値とを目的として生産されるのである。又た交換その者に於ては、商品が如何にして生産されるかと云ふ問題は、其價値決定の上に非常な關係がある。然し生産物の効用性といふことは問題にならぬ。資本家は聖書の代りに避姙藥を造つても善いのである。しかのみならず、資本家的商品生産の目的は利潤を獲得することにあるのだから、若し目的さへ達せられるならば、資本家は絶對に無効用な物でも造る。資本家が實際斯くの如き無効用物を造らないのは、そんな物を造つたのでは、買ひ手が得られぬからである。そこで何うしても効用物を造らなければならぬ譯であるが、然し資本家自身としては、自分の造るものが實際効用物であるかないかに頓着しない。

又自分の造つたものが、何人かに對して何かの効用がありさへすれば、卽ち賣れる品物でありさへすれば善いので、それを効用的たらしめる事柄に對して

は一向に無頓着である。何んな型のものでも、何んな色合でも、何んな柄でも、賣れるものなら何でも造る。赤でも黑でも、丸い物でも四角の物でも、柔かい物でも固い物でも、兎にかく賣れさへすれば善いのだ。

所が勞働になると、其んな呑氣な事は言つて居れぬ。資本家は注文に依つて何んな品物でも造るが、それを造るに要する勞働の分量に關しては頗る神經過敏である。一定の價格に對して、例へば十日間百人の勞働が適當と思へば、其勞働量の範圍内に於て資本家は如何なる種類性質の品物でも造ることを辭せないが、其同じ價格に對して一人でも一時間でも勞働の增量することには頗る憎病である。

と言ふのは、交換比例といふものは元來分量關係である。分量關係は同じ種類性質の物にのみ考へ得られる事である。隨つて、互ひに種類を異にする物の

一般的効用性の大さを測ることは絶對に不可能である。我々は百斤の牛肉と二打の帽子とに含まるゝ、夫々の効用の分量を如何にして測るか。一般的効用性は到底その分量を測ることの出來ぬものである。分量の測れない物は、價値の尺度となることは出來ぬ。價値の尺度となることの出來ぬ物は、價値の原因となることは出來ぬ。なぜならば、我々は價値の尺度に現はれた價値變動を見て、價値の原因を判斷するからである。我々は只、價値の尺度に依つてのみ、價値の存在を發見することが出來るからである。

要するに一般的効用性は、其分量を測ることの出來ぬものであるから、價値の尺度となることは出來ぬ。隨つて價値の原因となることも出來ぬ。所が勞働に於ては然らず。商品に含まるゝ特殊の勞働を抽象し去るといふことは、勞働の種類性質を抽象し去るのであつて、決して其分量を抽象し去るのではない。

抽象的、一般的勞働は只その分量のみを測度し得るものである。隨つて、それは價値の尺度となり、原因となることが出來る。

20　效用は價値の制限

斯く云へば、マルクスは効用性の交換價値に對する影響を全然無視したかのやうに聞えるが、事實は決してさうでない。効用性は交換價値の尺度でもなく原因でもないが、然しそれが交換價値成立の一條件であることをマルクスは拒まない。即ち効用性は交換價値を制限するものである。

曩に述べた如く、マルクスに依れば價値を造るものは、個々の特殊の勞働でなく、『社會的に必要』なる勞働である。そして、此『社會的に必要』と云ふ概念の中には、既に社會に對する商品の一般的並びに相對的効用性が含まれてゐる、其効用性の課する限界内に於てのみ、一般的人間勞働は交換價値の尺度と

なり原因となるのである。されば マルクスが價値の條件として、使用價値を無視したと云ふ非難は當らない。マルクスは只、價値の尺度及び原因の範圍から使用價値を締出したに過ぎぬ。

21　富に對して自然を無視せず

バエルクは又、マルクスが『財貨の生產』に對する『自然の關與』を否認したことを攻擊してゐる。

然し之れは飛んでもない感違ひである。マルクスは價値の原因としては自然を問題外に置いたが、財貨、即ち商品の自然體（或は使用價値としての商品）の要素としては、明かに自然の働きを認めてゐる。彼れは商品體が『二つの要素、即ち自然物質と勞働との合成である』ことを主張し、『人類は其生產に於て、只だ自然それ身體の爲る通りに振舞ひ得るに過ぎぬ。即ち只だ物質の形體を變

更し得るに過ぎぬ。しかのみならず、此形體變更の勞働に於ても、人類は常に諸々の自然力の支持を受ける。故に勞働は其所產たる使用價値の、即ち物質的富の唯一の源泉ではない。キリヤム・ペティの言ふ如く、勞働は物質的富の父であり、土地は即ち其母である』と言つてゐる。

一八七五年、ゴータに開かれたるドイツ社會黨大會は一の政綱を通過した。此政綱の書き出しは『勞働は一切の富及一切文化の源泉なり』といふのであつた。當時マルクスは遠地より書を寄せて、此一句の修正を求めた。彼れは言つた。『勞働は總ての富の唯一の源泉ではない。自然も亦同じく其源泉である。否、勞働自身が實は自然力の一部たる人間勞働力の發現である』と。

斯の如く、マルクスは富、財貨、或は使用價値の生產に對する自然の『關與』を少しも『否認』しなかつた。彼が勞働を唯一の原因と云つたのは、財貨でな

くて價値である。價値と財貨は別物である。價値は歴史的概念であつて、只商品生産の時代にのみ當嵌る。それは一個の社會的關係である。之に反して財貨は全く物質的のものである。それは一切の社會形體を超絶する。されば勞働が財貨の唯一の原因でないと云ふことゝ、價値は勞働のみから生ずると云ふ斷定とは少しも矛盾しない。（附錄「富と價値」參照）

22　需給と價値とは沒交渉

バエルクは更らに、勞働以外、自然以外にも、尙ほ交換價値を決定する要素があると言つて、需要に比べて財貨の稀少なること、財貨が需給の目的物であること、及び其れが人類に領有されることの三ヶ條を擧げてゐる。

右の中、第三の財貨が人類に領有されると云ふことは、自然が價値の原因でないと同じ意味に於て價値の原因となることは出來ぬ。商品生産の發生前、財

貨は既に長い間人類に領有されてゐた。然るに價値は、商品生産に伴ふ歴史的の現象である。隨つて領有は、價値の必然的原因となることは出來ぬ。

次ぎに右の第二と第一とは、要するに同じ事を違つた言葉で言ひ現したものに過ぎぬ。財貨が需要に比べて稀少であると云ふことは、財貨が需用供給の目的物であると云ふことゝ、同じ内容を意味してゐる。いづれにしても、需給が價値の一原因を成すと云ふのがバエルクの主張である。

然しそれは謬論である。元來、需要と供給とは反對の方向に働く。そこで假りに需給が價値を支配すると云ふバエルクの見地から出發すると、供給が增加する時には價値が減少し、供給が減ずれば價値は增大する。需要に於ては、それが丁度反對になる。

そこで玆に問題となることは、需給が平衡を保つた場合、卽ち其双方が一致

した場合は、何うかと云ふことである。其場合には、價値は必然に消滅しなければならぬ。然るに商品は需給の一致するとしないとに拘はらず、常に一定の交換價値を有してゐる。それは何う云ふ譯であるか。

マルクスに依れば、價値は元來相對的のものであつて、交換に依つて始めてそれを確めることが出來る。我々は或商品の價値を考へる時、必ずそれを他の何物かと比較する。交換（或は賣買）は必ず一定の比例に於て行はれる。今假りに卓子と椅子とを例に取る。そして其双方の需給が平準を保つ場合双方の交換比例は一に對する二であるとして見る。卽ち卓子一箇に對して二脚の椅子が交換される。所で此双方の相對的價値は抑も何によつて定まるか。需給關係は双方とも平準を保つてゐるのだから、其交換比例は正に一に對する一でなければならぬ筈である。

所で假りに双方の需給が五割づゝ增加したとして見る。若し此場合、他商品の需給關係に變化なしとすれば、卓子と椅子との『價値』は、バエルクから見て當然低落しなければならぬ筈であるが、而も其双方の相對的價値は依然として同じである。其交換比例は依然として一に對する二である。之れは供給の代りに需要が增加した場合に於ても同じ事である。つまり需要供給の如何なる狀態のもとに於ても、卓子と椅子との相對的價値は一に對する二の比例を保つてゐる。されば需要供給の如何に拘らず其相對的價値を不變ならしむる何ものかが、卓子と椅子との兩者に含まれて居なければならぬ。それが卽ち勞働であつて、此勞働の分量の大小が双方の相對的價値を決定するのである。

需給關係に只だ一商品の價格が何ゆえ其價値を中心として上下するかを說明するに過ぎぬ。其價格の上下する價値の決定原因は、勞働價値說を外にしては、

何うしても之れを說明することが出來ぬ。

23『自然物』の價値

自然が價値の原因を形成せざることは、先きに述ぶる通りであるが、茲に又實際論として次ぎのやうな批評が提出されてゐる。

總ての自然物に價値があると云ふ譯ではないが、然し勞働を少しも含まない自然物でも若し其分量に制限がある時には、價値を有することになる。バエルクは言ふ。天界から隕星として落下した自然の儘の金塊、或はまた偶然發見された銀山といふやうなものは、少しも勞働を含まないが、それでも價値を有するのは何う云ふ譯かと。また敎授クニースは、一コータアの小麥が一コルドの木材と同價値なる場合、人工を加へた森林から得られる木材と、原始的森林から得られる木材との間に差異があるかと言つてゐる。更に敎授マッサリックは

言ふ。『處女地は何ゆえ賣買されるか』と。

以上、諸敎授の謂ゆる自然なるものは、之れを二つの種類に大別することが出來る。一は勞働なしに獲得されると云ふことが全く偶然である物、他は勞働を用ゐざることが其唯一の獲得法である物。前記の天から降つて來た金塊や、偶然に發見された銀山は前者に屬し、土地や原始的森林は後者に屬する。

そこで先づ前者に就て考へて見るに、之れらの自然物が他の勞働を費した物と同じく價値を有することは、少しもマルクス說と衝突しない。我々が天から降つて來た金塊を無價値のものとして放擲しないのは、天がいつも金塊を雨降らさないからである。金塊を得る一般の方法が、必ず勞働の消費を意味するからである。隨つて若し偶然に落下し來つた金塊を放擲してしまふならば、後にそれが必要になつた場合に勞働を費さずしてそれを得ることは出來ぬ。

つまり偶然發見された金塊は勞働を含まなくとも、他の金塊は皆な勞働の結果であるから、其偶然に發見された金塊も矢張り他の金塊と同じ價値を有することになる。偶然に發見された銀山の場合も矢張り其通りである。

次に前記の第二種類に屬する自然物は何うかと云ふに、之等の自然物には價値が無い。土地にしろ、未開森林にしろ、勞働を費さないと云ふことが其獲得の原則である物には價値がない。

然らば斯ように價値のない例へば土地の如きものが、事實上一定の價格を以て賣買されてゐるのは何う云ふ譯かと云ふ疑問が起る。

マルクス説に依れば、斯くの如き價格は價値を代表しないで、價値以外の或物を代表する。マルクスは地代が土地の價値の結果でないことを主張してゐる。地價卽ち土地の價格なるものは、實は此地代を資本化したものに外ならぬ。地

價は地代に一定の年數を乘じた結果である。此年數は一般の金利歩合に依つて定まる。換言すれば、土地に對して支拂はるゝ價格は、其土地の價値を代表しないで、其地代の價格を代表する。土地の賣買なるものは、畢竟地代の割引に過ぎぬもので、本質上、年金の賣買と少しも違はないのである。

24　剩餘價値説反對論の類別

マルクス價値説に對しては、右の外尙ほいろ〳〵の反對説が提出されてゐるが、玆で一々それらを檢分する餘裕はないから、價値説の方は先づ此位ゐで切り上げ、終りに剩餘價値説に對する批評を一瞥して筆を擱く。

マルクスに依れば、剩餘價値は商品の流通行程からでなく、生産行程から生じなければならぬ。之れは先きに述ぶる通りである。

然るにマルクスの剩餘價値説に對する批評の殆ど全部は、剩餘價値の出處を

流通行程内に求めてゐる。そして其れらの批評は之れを三部類に大別することが出來る。

即ち第一は價値と使用價値とを混同する說。第二は商品の交換（或は賣買）が、一般に同じ大さの價値の取引でないと云ふ說。第三は或一部の商品所有者が、其商品を價値以上に賣ると云ふ說。

25　福田博士の帽子の比喩

右の中、第一說は最も廣く行はれてゐる。其言分は『自分に價値の少ない品物を提供し、それに對して、自分に一層價値の多い品物を受ける』と云ふことである。此說の最も手近かの代表者は、お馴染の福田德三博士である。

福田博士は其著『國民經濟講話』に於て、帽子の例を引き『私は一圓で帽子を買ひ、帽子屋は一圓で帽子を賣ります。實は帽子屋は一圓で無い帽子を一圓

で賣り、私は一圓以上の價を持つてゐる帽子を一圓で買ふのです。帽子屋の賣る一圓の價は必らず彼の費した價よりは大である。私が拂ふ處の一圓の價は、之れを買はんと欲する價よりは必らず小であります。物の賣價は賣物の價より必らず大であり、買物より必ず小であります』と言はれてゐる。

即ち博士に依れば、物の賣買は、一方に『賣手の剩餘』を生ずると同時に、又『買手の剩餘』を造る。博士は此『買手の剩餘』を說明して曰く『一圓の金を今此處に持つてゐる。其の持つてゐる一圓の金の用と、買ふ一圓の帽子の用と私に取つて全く同じであれば、其帽子を買ふことは無駄であります。其帽子を一圓出して買ふと云ふからには、一圓の金で持つて居るよりも、一圓の帽子を買つて被つた方が今役に立つからである。』

つまり博士が『剩餘』と言はれてゐるものは、マルクスの言ふ『價値』の剩

餘でなく、『用』の剩餘である、使用價値の剩餘である。そこで私は曾て博士の此說明を批評して言つたことがある。『パン屋は四錢のパンを五錢に賣つて、一錢の剩餘を得る。今にも餓死しやうと云ふ人に取つては、其五錢のパンは恐らく千萬圓の金殿玉樓にも優るであらう。そこで博士の論法を借りて云へば、此人が買手として得る剩餘は、實に九百九十九萬九千九百九十九圓九十五錢に當る譯である。之では天下空腹に優る金儲はない事になる』と。斯の如き奇拔な結論に達するのも、要するに博士が價値の一般的體現たる（卽ち純社會的、客觀的關係たる）貨幣と、其貨幣で買つた帽子やパンの使用價値の分量（卽ち純個人的、主觀的關係）とを混同された結果である。

博士は又、其の名著『勞働經濟講話』の中で、剩餘價値の生ずる所以は、物の『費用價値』よりも其價値の方が大きい結果であると說いて居られる。其說明

として博士はまた帽子の例を引いて曰く、

『私が一圓出して帽子一箇を求めるときは、此一圓は卽ち一の費用價値でありますが、帽子の價値の全體ではありません。帽子は私にとつては一圓以上の價値があります。』と。私は曾て此說明を批評して次の如く言つた。

『假りに此帽子の價値を一圓二十錢とする。すると、私は此帽子を買ふことに依つて二十錢の剩餘價値を得る譯である。所が福田氏の說によると、費用價値よりも價値の方が大きくなつては剩餘價値が生じないのであるから、帽子屋の方から云へば、一圓の費用價値ある帽子を一圓以上、例へば一圓二十錢に賣らなくては剩餘價値が得られぬ譯である。之れを一圓二十錢で賣れば賣手は二十錢の剩餘價値を得るが、それと同時に、買手の二十錢はフイになつてしまふではないか。』

私は更らに念を押して『それとも買手は一圓二十錢の價値ある帽子を、例へば一圓十錢で買つて、双方同時に十錢づゝの剩餘を得ると解して然るべきものにや。若し然りとすれば、福田氏が先きに「私が一圓出して帽子一箇を求めるときには、此一圓は卽ち一の費用價値であります」と云つて、買手が常に費用價値に從つて物を買ふやうに云はれたことがお可笑しくなるではないか』と。

（附錄『勞働經濟講話を讀む』參照）

私は福田博士の混同說に對して、此の上尙ほ蛇足を加へる必要を感じない。要するに價値を使用價値から解放しない以上は、剩餘價値は永遠に闇でなければならぬ。

26 社會全體に價値の剩餘なし

次ぎは商品の賣買が一般に同じ大さの價値の取引でないと云ふ說。

マルクスに依れば、交換は原則として同じ大さの價値の間に行はれる。彼れは此原則のもとに剩餘價値の存在を可能とした。然るに此第二の反對論に依ると、剩餘價値の發生は右の商品交換の原則が破れた時に始めて行はれる。卽ち商品所有者が剩餘價値を得るのは。其商品を實際の價値以上に高く賣る結果だと說くのである。

例へば此處に洋服屋がある。彼れは何かの手管で實際五十圓の價値ある羅紗服を七十圓に賣りつけることが出來た。斯くて彼れは二十圓の儲けを得る。それが卽ち剩餘價値であると言ふのである。

なるほど其れは儲けに違ひない。然し世の中に買ふことなしの賣り手と云ふものはない。洋服屋は其原料を羅紗問屋から買はねばならぬ。彼れは更らに其賣上げで種々なる生活品を買はなければならぬ。そこで若し商品交換の原則が

一般に破壞されると云ふことになれば、問屋は彼れに安い羅紗を高く賣り、味噌屋も米屋も皆な低い價値を高く賣りつけるから、結局彼れが賣り手として得た『剩餘價値』は、買ひ手として皆な他の賣り手に取られてしまふことになる。かくて社會全體から云へば、剩餘價値を得るものが一人もなくなり、結局利潤存在の事實を説明することが出來なくなる。

27　泥棒の剩餘價値

そこで今度は第三の珍説が持出される。即ち總ての商品所有者でなく、或一部の商品所有者が、價値以上に賣り、價値以下に買ふといふのである。

例へば或商人が農夫から百圓の價値ある馬鈴薯を九十圓で買つて、それを百十圓で洋服屋に賣る。すると結局、彼れは二十圓の利益を占めることになるが、然しそれが爲に價値の總額は微塵も增加しない。即ち最初は 100圓（農夫）＋

90 圓（商人）＋ 100圓（洋服屋）＝ 300圓 であつたが、此取引の結果も矢張り 90圓（農夫）＋110圓（商人）＋ 100圓（洋服屋）＝ 300圓であつて、全體の上に剩餘は一文も生じない。

尤も之れによつて右の商人は二十圓儲けることになるが、然し其儲けは價値增加の結果ではなく、却つて他の取引當事者の有する價値が減少した結果である。かくて前の場合と同じく社會全體の價値は微塵も增加しない。

そこでカウツキーは、若し此商人の儲けを剩餘價値と云ふならば、泥棒の得物は悉くみな剩餘價値でなければならぬと言つてゐる。

（ベエルクの部は主としてブザーンに據る）

第六章　資本論第三卷まで

1　はしがき

マルクス『資本論』第一卷の全譯はマダ公にされないが、其大要は既に幾度びか紹介された。曾て山川均氏が『大阪平民新聞』で其梗概を紹介したことがある。福田德三博士の『勞働經濟講話』にも、可なり詳しく紹介してある。其他何々博士何々教授の經濟學や社會問題に關した書物を見ると、大抵曲りなりにも其梗概を紹介してある。近くは又、賣文社から其解說書が出た。

それで歐羅巴語の讀めぬ人でも、『資本論』第一卷に何んな事が書いてあるか位ゐは大體見當がつく。所が第二卷第三卷になると中々さうでない。殊に第三卷は、其の經濟學的價値に於て第一卷に劣らぬものと云はれてゐる位ゐであるが、

從來その要點を批評したものとしては、僅かに福田博士の『經濟學講義』があるばかり。

そこで何とかして、其ホンノ大體の骨子だけでも紹介し度いとは、私の日頃の縮願であつたが、何しろ事が面倒なので已めにした。玆に紹介するものは、第三卷の梗概と云ふよりは、寧ろ其梗概の序文に過ぎぬものである。

2　資本論矛盾說の矛盾

マルクス批評家の中には、マルクスが『資本論』第一卷の立場を第三卷に於て覆へしたと主張する者がある。然し此說の取るに足らぬことは、之等兩卷の內容よりも先づマルクスの著述履歷が之を明かに證明してゐる。元來、マルクスは一八四七年、既に其經濟說の根本觀念を明白に造り上げてゐたので、箇々の特殊問題に關する細目に就ても其多くは既に一八六三年迄に草稿として纒め

られてあつた。『資本論』前後三卷、及びエンゲルスが其第四卷として編纂する筈であつた『剩餘價値學說史』の重要部分は、總て之等の草稿中に含まれてゐた。其後に造られた草稿は、只だ右の一八六三年迄の分を補充布衍したのみで、原理の上には何等新らしき物を加へなかつた。

されば一八六七年、マルクスが『資本論』第一卷を公にした當時には、第三卷の骨子は既に全部仕組まれてあつたので、若し論者の主張する如く、第三卷に依つて第一卷の原理が顚覆されたとすれば、第一卷の原理は其れを書かぬ先きに既に裏切られてゐたものと解するの外はない。マルクス程の大知識が、マサカそんなヘマを爲る筈はなからう。又爲たにした所で其れを氣付かぬ譯はない。氣付けば何とかボロを出さぬやうな細工をしさうなものだ。

3　資本論前期の諸作

以上はマルクスの著述史から見た辯解であるが、更らに兩卷の內容から判斷しても、一向怪しい所はない。否、見事に首尾一貫してゐる。第三卷は第一卷の否定でなくて、其當然の歸結であることが分る。

『資本論』前期に於けるマルクスの經濟著書を年代順で數へてゆくと、先づ『哲學の窮困』及び『賃銀勞働と資本』を擧げねばならぬ。此一つは何づれも一八四七年に公にされたもので、當時マルクスは尙未だ『勞働』と『勞働力』との區別を立てることが出來なかつた。卽ち勞働は價値を造るも、それ自體には價値を有せざる人間行爲であるが、勞働力は其れ自體に價値を有する一箇の商品であつて、其商品の價値はそれが再生產に要する勞働時に依つて定まると云ふ、重要な區別を立てることが出來なかつた。正統派經濟學に從ひ、勞働力と云ふべき所を尙勞働と呼んでゐた。

『哲學の窮困』及び『賃銀勞働と資本』に次いで、一八五九年『經濟學批評』が公にされた。此書は後年『資本論』第一卷の根底を成した價値及び使用價値の解剖を行つたもので、マルクスは之に關して『資本論』第一卷第一版の序文中に次の如く言つてゐる。『經濟學研究の內容は本卷第一篇第一章に概括されてある。其概括は單に連絡及び完備の爲のみではなく、又、其說明を改善した。如何やうにか事情の許す限り、彼書に於ては單に暗示に止まつてゐた多くの點を、本書では一層充分に說明した。反對に又、彼書に於て詳細に說明した事を、本書ではホンノ暗示に止めた所もある。彼書に納めた價値及貨幣說の歷史に關する諸節は、言ふまでもなく、全部之を削除した。然し彼書の讀者は本書第一篇第一章の傍註に於て、右の學說の歷史に關する新らしき參考資料を發見するであらう。』

斯の如く『經濟學批評』の實質は、總て『資本論』第一卷の中に精選復載されてあるが、さればと云つて後者が出來たから前者はモウ不要だと云ふ譯ではない。殊に前者の序文中に納むる唯物史觀の組織的說明は、マルクスが此方面に殘した最も貴重の文書と云はれてゐる。

價値及び使用價値の問題は、既に『經濟學批評』の中に取扱はれてゐるが、剩餘價値及び利潤に對する其關係に就ては、同書にはまだ何等の說明が與へられなかつた。前記の『賃銀勞働と資本』では既に資本が剩餘價値の結果であることを說いてゐるが、勞働及び勞働力を價値に對する其關係に於て解剖しなかつたので、剩餘價値及び利潤の問題並びに勞働力對資本の交換に於ける物價の働き、更に剩餘價値の產出及び其の利潤化に關する問題に就ては、尙ほ不明の域を脫することが出來なかつた。

右に次いで此方面に一歩を進めたものは、『價値、價格及び利潤』に關する講演であつた。此講演は一八六五年六月、國際勞働者總會に於て述べられたもので、マルクス説の總體に對する一瞥と見ることが出來る。それは單に『資本論』第一卷の主題を含むのみならず、又全三卷の問題に觸れてゐる。若し『資本論』第一卷の讀者にして、此講演の一語一句を熟讀玩味したならば、彼等は商品が常に何處に於ても、其價値通りに賣買されるか何うかと云ふ問題に就て、左程頭を痛める必要はなかつたであらう。なぜならば、マルクスは此講演に於て既にエストンの賃銀基金固定説を否認し、生産及分配に於ける諸々の要件が絶えず變動しつゝある事、及び價格が資本家の自由意志に基かずして經濟的理法に左右せらるゝ事、並びに賃銀の增騰は消費資料に對する勞働者の需要を增大し、此需要增加は遂に消費資料の供給を超過するに至るが故に、結局物價騰貴を招

來するに過ぎぬことを明かにした 斯くの如くにして、價格は一時的に價値より遠ざかることあるも、軈て競爭の作用は、徐々に物價の平衡を恢復するであらう。

以上は勿論、ホンノ暗示として、右の講演に含まれて居る。其眞意義は『資本論』第三卷に依つて始めて明瞭になつた。尤も第一卷の中にも、其多少の暗示は與へられて居る。

尙、も一つ此講演に於て一層重要なる事は、平均利潤率が甲の生産部門に於て低落し、乙の生産部門に於て上進する結果、甲の資本が乙に移轉すると云ふ問題である。元來、一定の生産部門に放下された總ての資本を通じて平均利潤率が實現されると云ふことは、其生産部門内の箇々の資本家が自己の生産物を其夫々の價値で賣らないで、價値とは必らずしも一致せざる價格で賣ると云ふこ

と、隨つて夫々の資本家は其夫々の產出する剩餘價値に比例してゞなく、其夫々の資本が當該生產部門の總資本に於て占むる百分率に比例して、利潤を收めると云ふことを意味する。

4　資本論第一卷の制限

以上は總て、マルクスが『資本論』第一卷を公にするズット以前に暗示した所であつて、若し第一卷の研究に當り、之等の暗示を忠實に念頭に置いたならば、總ての商品は其夫々の價値で賣られると云ふ問題を中心とする、例の論爭は悉く之を避けることが出來たであらう。右の講演は實に、一八八五年エンゲルスが『資本論』第二卷の序文に於て經濟學者に提出したる課題の解決手引たり得るものであつた。元來マルクス說に依れば、同じ大さの資本でも、其組成分子たる可變資本と不變資本との比例が違へば、其獲得する剩餘價値の分量も

亦當然に異つて來たらねばならぬ筈である。然るに事實は夫と反對に、可變部分と不變部分との比例を異にする種々なる同額の資本は、同一期間內に同額の平均利潤を獲得してゐる。此事實に對して、マルクス說を如何に調和すべきかと云ふのが、右のエンゲルスの課題の要旨であつた。此課題の解決は旣に前記の講演中に含まれてゐる。此講演に於て、マルクスはアダム・スミスに關連し『自然價格』(平均價値)が物價動搖の中心點を成してゐる事を述べた。今、此暗示を、可變資本對不變資本の比例變化より受くる剩餘價値產出上の影響に就て試みたるマルクスの解剖と合せ考ふる時は、右に云ふエンゲルスの課題の解決方途は、容易に之を窺知することが出來る。

尤も右の講演では、マルクスはまだ『剩餘價値率』と云ふべき所を『利潤率』と呼んでゐる。然し彼は一方に、平均構成の資本を假定してゐる。平均構成の

資本は其商品を價値通りに賣る。隨つて此場合、利潤は剩餘價値と一致する。唯、彼れは利潤率は之を總資本に對する計算に求むべきか、それとも可變資本に對する計算に求むべきかに就て、明確の判斷を缺いてゐた。然し此缺點は、『資本論』第一卷に於て全然訂正された。

以上の外、マルクスは當時尙ほ左の諸點に就て充分の說明を公にすることが出來なかつた。卽ち可變資本對不變資本の比例變化が、絕對的及び相對的剩餘價値に及ぼす影響。商品それ〴〵の價値とは必らずしも一致せざる價格の働きに依り、剩餘價値が利潤に轉化すること、及び此轉化を支配する一般的理法。

右の中、第一點は『資本論』第一卷に於て充分に闡明された。然し第一卷も第二卷も、剩餘價値對利潤の關係を說明しなかつた。此最初の兩卷は總ての商品が其價値通りに賣買されると云ふ假定に立つた。それは說明の混雜を避くる

爲に必要なことであつて、マルクスは決して箇々の事業が此假定通りに進行してゐるとは信じなかつた。然るに、『資本論』以前に於けるマルクスの諸著作、殊に前記の講演『價値、價格、及び利潤』を知らぬ人々は、動もすればマルクスが箇々の事實も亦右の假定通り進んで居るかの如く信じたやうに主張する。そこでマルクスが第三卷に至り、箇々の事實と右の假定との間に不一致の存することを認むるや、彼れらは玆ぞと計りにマルクスの變說改論を喋々するのである。

5　第一卷及第二卷の目的

然らば第一卷及び第二卷の右の假定は、全然事實に立脚せざる架空の斷案かと云ふに決してさうでない。否、此兩卷の研究對象の範圍內に於ては全然事實に一致して居る。なぜならば、此兩卷の目的は生產及び流通方面に於ける全體

としての社會的資本を取扱ふことであつて、此全體としての社會的資本に對しては、商品が其價値通りに賣られると解し得るからである。

殊に第一卷は、賃銀勞働者と資本家との歴史的關係を說明するのが目的であつて、箇々の資本家間の關係を研究するのではなかつた。從つて、社會及び其全體としての資本勞働の立場を離れる必要は毫も存しなかつたのである。

要するに、第一卷も第二卷も、社會的總剩餘價値が箇々の資本家の間に分裂する問題とは沒交涉であつて、剩餘價値の利潤化は敢て問ふ必要がなかつたのである。卽ち第一卷は單に商品の生產のみを取扱ひ、等二卷は其流通を取扱つた。そして資本の諸相及び諸機能は、必要勞働に對する其關係に於て分析された。

然し此兩卷を綿密に研究し、そして其れを第三卷と比較對照するならば、前

者の職分が畢竟後者の道ならしに過ぎぬことを發見するであらう。マルクスは第一卷に於いて、資本が可變及び不變の兩部分に分裂することが、剩餘價値造出に對して有する重要意義を明かにし、第二卷に於ては更に不變資本が固定及び流動の兩部分に分裂することが、資本の回轉に、從つて剩餘價値の流通に對して有する重要意義を明かにした。此後者の意義は、我々が第三卷に入り、生產費及び生產價格（卽ち生產費に平均利潤を加へたるもの）の成立に對する固定資本の役目を研究するに及んで判明する。我々は又、此固定資本と流動資本との區別に依つて、資本家が常に其利潤率を自已の總資本に對して計算し、其計算に於て、總資本中の固定部分が全部消費されたか何うかに關しては一向頓着しない事、そして又其動機が專ら自已の收得する利潤を、其實際額よりも小さく見せるにある事を發見する。

6　平均利潤及び生産價格

斯くの如く、『資本論』前期の諸作、及び資本論の最初の二卷を仔細に調べて見るならば、我々はマルクスが『資本論』第三卷に於て、寸分も其前二卷の根本原理を變更したものでないことを發見する。マルクスの經濟著書は總てが同じ方向への論理的段階である。總てか同じ根本材料に立脚してゐる。勿論、用語には一致を缺いた點もある。然し其用語の意義は一々説明してある。又少なくとも、『資本論』前後三卷を通じては總ての用語は一貫してゐる。

マルクスが『資本論』第一卷に於て、價値及び使用價値、並びに不變資本、及び可變資本に關して與へた説明、更に第二卷の固定資本及び流動資本に關する説明は、總て其資本構成説の根本材料を成したものである。そして『資本論』第三卷の主題たる剩餘價値の利潤化、平均利潤率の成立等は、みな此資本構成

説の必然の歸結である。元來、第一卷及び第二卷は、商品が其價値通りに賣買されると云ふ前提に立つてゐる。而も此前提は、社會の總資本を全體として見たる場合、或は只、社會の總資本と同じ有機的構成を有する資本（斯くの如き資本を平均的構成の資本と呼ぶ）に對してのみ可能である。

然るに社會の、若しくは同じ生産部門の、夫々の資本が、いづれも此平均的構成を有すると云ふことは事實あり得ない。社會の總資本の中、或者は其構成の發達が平均よりも後れて居り、不變部分よりも可變部分の方が、平均以上に大きい。之を低度構成の資本と云ふ。之に反して或資本は又其構成の發達が平均より進んで居る。卽ち可變部分よりも不變部分の方が平均以上に大きい。之を高度構成の資本と呼ぶ。

扨て總ての資本は、競爭市場に於ける販賣を目的として商品を造る。そこで

若し、需要供給の關係が平準を保つとすれば、平均的構成の資本は其生産物を價値（卽ち不變資本、可變資本及び剩餘價値の總和）通りに賣る。同樣に他の夫々の資本も亦、此平均構成の資本が決定する平均價格にて其生産物を賣る。然るに高き構成の資本は、平均構成の資本よりも一層低價値で商品を生産するので其商品の販賣に依つて得られる平均利潤は、それを其の價値通りに賣る場合よりも、一層多くの剩餘價値を含むことになる。之に反して低度構成の資本は、平均構成の資本よりも高價値に商品を造るので、單に平均的利潤しか得られぬとすれば結局其の剩餘價値の一部を喪失することになる。

斯くて總ての資本は、各生産部門の、若しくば社會全體の平均的生産條件に依つて決定される平均價格で、其夫々の生産商品を賣る。そして總ての生産方面に於て、其謂はゞ基調的部門を成すものは、生活必要品を生産する部門である。生活必要品は實に勞働者の生活の大部分を形成するもので、不變資本に對する可變資本の價値比例を決定するものである。いづれの資本も生産費（卽ち消費せられたる可變資本と不變資本との總和）に平均利潤を附加へる。そして此生産費と平均利潤との總和は、マルクスの謂ゆる生産價格を成す。平均構成の資本の生産價格は、卽ち平均的生産價格である。

7　利潤遞減の法則

然るに需要供給は元來平均化の傾向を有するが、實際平均を保つことはない。人口の增殖と同時に、勞働の生産力も亦、生産技術の進歩、新沃土の開墾その他に依つて增進する。斯くて生産は屢々需要を超過して增大する。其の結果、資本は甲の生産方面を去つて、乙の生産方面に集中する。同じ一國内に於ても、勞働者の有り餘る生産方面と、不足なる方面とが出來てくる。斯くて甲時代に

於ける平均的資本の調節地位は、乙時代に於ける其れと違つた構成の資本に取つて代はられる。そして高度構成の資本は、生産技術なり、需要供給なりの變動に依つて競爭の高まる毎に、最も有利の位置を占むるもので、平均構成及び低度構成の資本よりも安價に賣つて、而も尙ほ利潤を贏得することが出來る。

されば平均利潤率は決して固定的のものでなく常に其大さを變更してゐる。そして競爭の力は常に可變資本よりも不變資本を一層急速に增大する傾きを帶びてゐるので、競爭の續く限り利潤率は益々低下する傾向がある。

8　獨占の出現と利子

然るに競爭の必然の歸結は獨占であつて、獨占の出現後と雖も尙、上記の不變資本が可變資本よりも一層急速に增大すると云ふ傾向は繼續するが、然し最早競爭を恐れる必要がない。獨占者は競爭の作用に依るよりも、寧ろヨリ多く

自己の欲する通りに其商品の價格を定めることが出來る。此、意識的な又氣儘な人間の制御力が、今や、制御し難き競爭の壓力に干涉し、競爭のもとに價値理法に依つて設けられた制限を超越する。

價値理法に打勝たうとする此獨占力は、競爭が尙市場を支配してゐる時に於ても、既に種々なる樣式を以て出現してゐる。殊に其初徵は利子及び地代の二方面に現はれる。

マルクスに依れば、利子も地代も共に剩餘價値の顯現態であつて、資本家的生産方法の下に於ては、双方とも多かれ少なかれ産業的利潤の支配を受ける。そして又、産業的利潤は價値の理法に支配される。利子地代は斯くの如く産業的利潤の支配を受くる限り、利潤率と共に遞減の傾向を有さなければならぬ。然るに利子地代は、最初より獨占的性質を帶びてゐる。そして其獨占される限

りに於て、それ等は多かれ少なかれ價値理法の支配を免れることが出來る。それと同時に價値理法は又競爭が產業界を支配する限り、多かれ少なかれ利子地代を支配する。

然るに銀行、株式會社、爲替手形等の發達と共に、利子は大部分、價値理法の支配を免れることになる。資本家的債券の多くは、其背後に現實の價値を有せず、銀行預金でさへも、其大部分は現實の價値に依つて支持せられざる有樣となる。而も之等の預金なり債券なりには、總て利子が支拂はれる。そこで此種の利子に關しては、マルクスはそれが價値理法に支配せられず、全く偶然の支配に屬すること、從つて其歩合を決定すべき一定の理法なきことを言明した。かくて產業的獨占の出現と共に、利子と產業利潤との必然的結合は悉く打破せられ、獨占者は社會的理法に頓着なく好き勝手に生產及分配を支配することが

出來る。然し彼等と雖も結局社會的理法の支配を免れることは出來ぬ。

合衆國最近の金利歩合は、南北戰爭當時に比して毫も劣らざるのみか、寧ろ一層高率を示してゐると云ふ事實から推して、マルクスの利潤率遞減說を否認する學者がある。然し之は大なる誤解であつて、マルクスは決して金利歩合が絕對に產業利潤率に從ふとは主張しなかつた。彼れは只、利子が競爭の下に獲得せらるゝ產業利潤の中から支拂はるゝ限り、產業的生產の理法が利子を支配すると說いたに過ぎぬ。彼れは決して、銀行、金貸業者、株式投機者等が獨占的地位を占め、其資本の大部分が假想價値であると云ふ事實を見逃さなかつた。又、金利歩合が大部分、貨幣獨占者をして其『資本』の使用に對し高利を課せしむる如き市況に決定されると云ふ事實をも否認しなかつた。されば我々は此點に於て、爪の垢ほどもマルクス說を『修正』する必要を見ない。我々はマル

クス説に依つて獨占の出限が齎らす一切の現象を充分に説明する事が出來る。

9　地代の種類及び本質

次に、地代に關してもマルクスは最初より、それが獨占の結果であることを認めてゐた。彼れは地代の史的形體を、勤勞地代、現物地代及び貨幣地代の三つに類別し、更に資本家的貨幣地代を相對的地代及び絶對的地代に類別した。そして此相對的地代は又二つの主要形體に類別される。其一は自然的豐度を異にする土地に、同時に放下したる資本より生じ、其二は同一の土地に順次に放下したる（而も夫々結果を異にする）資本より生ずるものである。

絶對的地代は地主の獨占的地位と農業特殊の性質より生ずるものである。元來農業資本は工業資本に比し、其構成が一般に低度である。即ち平均構成の資本に比し、其可變部分が比較的大きい。從つて其剰餘價値率が比較的高いので

ある。利潤平均化の傾向に從へば、此平均率以上に高い剰餘價値部分は、他の平均以下に低い資本の方へ流れ込むべき筈であるが、土地は元來獨占的のものであつて、競爭の壓迫を超絶してゐるので、結局農業資本家は工業資本家と同じく平均利潤率を以て滿足し、それ以上の剰餘價値を地代として地主に支拂ふ。之が即ち絶對的地代ある。

前に言ふ相對的地代は、此絶對的地代以上に尙土地の豐度、諸種の自然力等に依る勞働生産力の增進より生ずるもので、地主は之等の有利なる條件を獨占してゐる。そこで之等の條件を具備する土地に放下された資本は、他の絶對的地代のみを生ずる最下等地に放下された資本の生産費及利潤に依つて決定される平均生産價格にて其農業生産物を賣ることが出來る。斯くして生ずる剰餘利潤は、獨占のお陰で利潤平均化の埒外に立ち、地代として地主の領有に歸する。

10　修正說の修正を要す

之等のことは、毫もマルクスの價値說と抵觸しないのみならず、却つてマルクスの價値說より出發する時に始めて其眞相を理解する事が出來る。利子地代がマルクスの價値理法に直接支配されないのは、獨占の必然的結果であつて、マルクスは最初より競爭の支配下に立つ商品生產の域內に於てのみ、其價値理法の行はるべきことを主張した。同時に又、彼れは獨占の事實及其必然の結果を看過しなかつた。此點に於て、マルクス說は一點一角も修正を要しない。修正を要するものはマルクス說でなくて、マルクス說に對する修正論者の有意無意の誤解その者でなくてはならぬ。

附錄

マルクスの貧困增大說

『一』

殆ど總てのマルクス批評家がマルクス說に對して投げる反對論の一は、貧困增大說を非とするの主張である。

マルクスは資本家制度の發達と共に、勞働者の貧困窮乏がますく甚だしくなると說いた。然るに事實は何づれの國に於ても、資本家制度の發達と共に、勞働者の生活程度は向上してゐる。隨つて、マルクスが資本制度の發達と共に、勞働者の階級的反感がますく强烈に赴くと說いたのは虛妄である。資本家制

度の發達は却つて必然に、資本對勞働の階級的離反を融和する。彼等は斯くしてマルクスの貧困增大說を打破したと信じてゐる。

『二』

成るほどマルクスは、資本の集中と共に、勞働階級が受ける『窮乏、壓迫、奴隷狀態、墮落、搾取』のいよ〳〵增加することを指摘した（資本論第一卷四版七一九頁）。然しながら其れは果して、勞働階級の實質的收入の減少、勞働者の貧困窮乏の絕對的增大を意味したものであらうか。

元來、窮乏と云ふ言葉には二つの意義がある。一は生理的窮乏で、他は社會的窮乏である。生理的窮乏とは人間の生理的欲求の充たされざる狀態を云ふ。人間の生理的欲求は決して固定不動のものではない。場所と時代に依つて變化する。然し其變化は社會的欲求ほど著しくない。そして此の社會的欲求の充さ

れざる狀態は卽ち社會的窮乏である。

そこで若し、マルクスが資本家制度の發達と共に勞働者の窮乏がます〳〵甚だしくなると說いた、其窮乏が右の生理的窮乏を指したものであるならば、彼れの說は確かに、其批評家の主張する如く虛妄である。なぜならば今日進步したる資本家國に於て、勞働者の生理的貧困が增大すると云ふ傾向は一般に認められぬ。寧ろ此の貧困は文明の進步と共に次第に減退の勢ひを示してゐる。勿論その勢ひはマルクス批評家の一般に主張する程顯著ではないが、それにしても兎にかく四五十年前の狀態に比較して、歐洲勞働者の生活程度が今日一般に向上してゐることは爭へぬ事實である。

所が社會的窮乏は、之と全然趣きを異にしてゐる。勞働者の社會的貧困は資本家制度の發達と並行して進む。資本家制度の發達は機械の發明である。生產

力の増進である。生産力の増進は富の増大を結果する。富の増大と共に勞働者の實質的收入も亦幾分か增大する。然しそれは決して富の增大と同比例を以て增大しない。富の增加率は勞働者の生活程度の向上率よりも遙かに大きい。

そこで資本家制度の發達と共に勞働者の生活程度は徐々に向上するが、それと共に勞働者と資本家との貧富の懸隔は又ます〳〵甚だしくなる。資本家制度が發達して社會の富が增大すれば、勞働者の欲求も亦ます〳〵多樣になり强烈を加へる。美しい着物が流行する。立派な建物が軒を並べる。電車が走る。自動車が飛ぶ。交通機關の未發達な時代には歩くことも左程辛らくない。然し今日のやうに、汽車や電車自動車が縱横に走るやうな時代になると、テクで歩くのが如何にも苦痛である。絹物づくめの社會にあて、自分獨り見すぼらしい木綿服を纏ふてゐることは誰れしも有難くない。つまり社會の富が增大し、文明

が進めば進むほど、人間の欲求も亦ます〳〵廣く深くなる。勞働者も亦人間である以上、此理に洩れる譯はない。かくて勞働者の社會的欲求はます〳〵增大するが、其欲求を充たす收入は欲求の殖える程には增加しない。マルクスが貧困の增大を主張した場合には、專ら此充たされざる社會的欲求の增大を眼目に置いた。生理的、絶對的貧困の增加は、彼れの關知せざる所であつた。

『三』

マルクスはいつも、勞働力が其價値通りに支拂はるゝ場合、卽ち賃銀が勞働力の生産費以下に降らない場合を前提として論を進めた。此場合でも尙、勞働者の貧困窮乏は增大する。それは剩餘價値を增加しやうと云ふ、資本家の努力に基くのである。

マルクスに依れば、剩餘價値には絶對的と相對的との二つがある。絶對的剩

餘價値を增大する最も單純なる方法は勞働時間を延長することである。然し之は無限に延長することが出來ぬ。勞働者の體力消耗は其自然的限界となる。そして勞働時間の延長が一度び此の限界に達すると、今度は反對に種々なる原因が働いて勞働時間を短縮せしめる。勞働時間短縮の傾向は、今日歐米諸國に殆ど共通の現象と云ふことが出來る。此意味に於て、勞働者の窮乏は次第に減少するとも云へる。

然し一方に於て、資本家は勞働時間を短縮して失つた利潤を恢收する爲に、勞働の强度を增進する。卽ちヨリ少ない時間に於て、ヨリ多くの勞働を搾取しやうとする。いづれにしても絕對的剩餘價値の增大に依つて、勞働者の貧困窮乏が增加すると云ふ傾向は、資本主義の著しく發達したる歐米諸國に於ては、既に不可能の域に達してゐる。

然し之が不可能となると共に、資本家は分業の促進と機械の完成とに依つて熟練勞働者の代りに不熟練勞働者を、男子の代りに女子を、大人の代りに小供を使用し、かくして相對的剩餘價値を增大しようと努める。此努力も亦、勞働者保護法の實施に依つて、次第に制肘される傾きがあるが、然し其制肘はまだ極めて不完全である。今日最も工場法の進んだ國に於ても、十四歲以上の兒童の保護は尙ほ頗る貧弱を極め、兒童搾取の種々なる方法は尙一切の制限を免れてゐる。

機械組織の發達と婦女勞働の增加とは、依然として尙無制限である。苟くも資本家制度の經濟的發達を阻害しまいとすれば、それは絕對に無制限でなければならぬ。勞働者の地位を低下するに此二つほど有力な方法はない。資本家は何んな事があつても、此二方法の使用を妨げられまいとする。他の方法の應用

が困難を加ふれば加ふるほど、彼等は此二方法にのみたよらざるを得なくなるのである。

『四』

斯くの如く婦女兒童の勞働が增加すると云ふことは、取りも直さず勞働階級の貧困窮乏が增大すると云ふことである。つまり親父一人の得る賃銀では、到底一家の欲求を充たすことが出來なくなると云ふ傾向の反映だ。此傾向の增進には親父の受くる賃銀が減少することも原因を成す場合がある。然しながら多くは、一家全體の欲求が親父の賃銀以上に增大した結果である。

いづれにしても、親父一人の賃銀で妻子を養ふ事が出來なくなれば、妻子も亦工場に入つて親父と共稼ぎする事を餘儀なくされる。他方に於て、男子はます〳〵結婚を避け賣淫婦に走る。之がために未婚女子の數はます〳〵多きを加

へ、其大部分は結局賃銀勞働にたよるの外はなくなる。斯くして資本家的生產方法は從來の家族組織を破壞し、而も之に代ふる新らしき家族組織を樹立することが出來ぬ。

『五』

結婚數の增減は、產業界の景氣如何に支配されることが多いので一概に速斷することは出來ぬが、然し資本主義の最も發達した歐洲諸國に於て、それが逐年減少の傾向を示してゐることは爭はれぬ事實である。試みに獨、墺、佛、英四國に就て、人口百に對する結婚數を擧ぐれば左の通りである。

年次	獨逸	墺地利	佛蘭西	英吉利
一八七二年	一〇・三	九・三	九・七	八・五
一八七三年	一〇・〇	八・九	八・八	八・六
一八七四年	九・五	九・〇	八・三	八・三

一八八〇年	七●五	七●六	七●四	七●三
一八八一年	七●五	八●〇	七●五	七●五
一八八二年	七●一	八●二	七●四	七●六
一八九〇年	八●〇	七●六	七●〇六	七●六
一八九一年	八●〇	七●八	七●五	七●七
一八九五年	七●九	七●九	七●五	七●四

結婚數は斯く逐年漸減の勢を示してゐるが、而かも總人口中、成年男女の數は反對に漸增の傾きを呈してゐる。之に就ては相憎く詳細の統計を持合せて居らぬが、獨逸一國について見ても、一八八〇年に於て十五歳以下の兒童數は總人口の三五●四パーセントであつたが、十年後の一八九〇年にはそれが三五●一五パーセントに減じてゐる。他方に於て既婚者數は同年間に一千八百十萬人から一千九百八十萬人に、卽ち九●三パーセントの增加を告げ、更らに十五歳以上の未婚者數は一千百十萬人から一千二百三十萬人に、卽ち一〇●二パーセントの

增加を示してゐる。

結婚數が斯く漸減すると共に、婦女勞働者は反對に驚くべき速度を以て激增してゐる。獨逸の職業婦人は一八八二年に於て五百五十四萬一千五百十七人であつたが、一八九五年には其れが六百五十七萬八千三百五十人に激增した。そして同年間に於ける商工方面の使用人及び賃銀勞働者の增率は左の通りであつた。

	使用人	賃銀勞働者
男子	一一五●六%	五二●八%
女子	二五四●七%	一〇四●九%

卽ち賃銀勞働者の中、女子は男子に比し二倍の速力を以て增加した。そして此女子勞働者の增加が、勞働階級全體の窮乏の增大の反映である事は前に述べた通りである。否、そればかりではない。婦女勞働の增加は窮乏增大の反映で

あると同時に、又更らに新らしき窮乏の原因となる。なぜならば婦女が賃銀勞働に縛ばられると云ふことは、取りも直さず家事の放擲を意味するからである。家庭を離れ賃銀勞働に疲れた主婦は、到底これ迄のやうに一家の經濟を重じて行くことが出來ぬ。食事も衣服の始末も、すべてが亂雜になり不經濟になる。小供の養育なども、殆ど顧みる遑がない。勞働者の家族生活は、斯くして一層悲慘を加へる。

次に兒童勞働者は何うかと云ふに、獨逸の賃銀勞働者百に就き二十歳以下の數は實に左の如く增加した。

農業		工業		商業		合計	
一八二二年	一八九五年	一八八二年	一八九五年	一八八二年	一八九五年	一八八二年	一八九五年
三〇・五一	三二・六一	二八・四一	二八・八〇	二三・〇九	二五・〇三	二九・二〇	三〇・一一

『六』

以上は專ら獨逸に就て述べたものであるが、他の資本家國に於ても大體の傾向は矢張り此通りであると信ずる。要するに、資本家制度の發達と共に勞働者の生理的窮乏は徐々に減少するが、それと同時に其社會的窮乏が益々甚だしくなることは爭はれぬ。そしてマルクスが『資本論』に於て强調した窮乏の增大は、實に此社會的窮乏を主眼としたものである。現にマルクスは勞働階級の貧困增大を主張した其同じ『資本論』に於て、工場法に依る勞働階級の生理的復活を高調してゐる。故に若しマルクスの謂ゆる貧困窮乏が單に生理的窮乏を指したものであるならば、彼れが一方に於て資本家制度の發達と共に工場法の發達を認め、工場法の發達と共に勞働階級の生理的復活を高調したことは、誠に笑ふべき矛盾と云はねばならぬ。マルクスほどの偉才を以てして斯くの如き頓馬な矛盾を豫見せざる筈はない。

「七」

エンゲルスは其一八九一年、マルクスの著『賃銀勞働と資本』に加へた序文の中で、勞資對立の增進を次ぎの事實に歸した。曰く、社會の富の增加と共に、資本階級の有に歸する富の部分はます〳〵增大する。『之に反して勞働階級の受ける部分は(頭わけにすると)極めて徐々に又ホンの僅かばかりしか增加しない。或は全く增加しないこともある。否、場合に依つては寧ろ減少することもある。勿論減少すべき筈だと云ふではないが。』つまりエンゲルスは勞資兩階級對立の增進を其貧富の懸隔の擴大に、卽ち勞働階級の社會的貧困の增大に歸したのである。

マルクスは云ふ。『第四篇(資本論)相對的剩餘價値の解剖に於て、我々は、勞働の社會的生產力を增進する總ての方法が、資本家的組織の下に於ては、箇々

の勞働者を犧牲にして行はれることを發見した。……然るに剩餘價値生產の總ての方法は、同時に又資本蓄積の方法である。そして資本の蓄積は又總て、剩餘價値生產の方法を發達する機關となる。故に資本の蓄積が進むと同じ程度に於て、勞働者の地位も亦、其賃銀の增減如何に拘はらず、益々不良に陷る。最後に、相對的過剩人口卽ち產業上の豫備軍をば、常に資本蓄積の範圍及び强度と均衡せしむる理法は、火神ヘフエイストスの楔が巨神プロメトイスを嚴に打付けたよりも、尙ほ一層固く勞働者を資本に括り付ける。此理法は資本の蓄積に應當した窮乏の蓄積を要求する。故に一端に於ける資本の蓄積は、同時に又、他端に於ける、卽ち自己の生產物を資本として生產する階級の、窮乏、勞働苦、奴隷狀態、無智、獸性化、道德的墮落である』(同上六七一頁)

見よ、マルクスは賃銀の減少、生理的窮乏の增大に就ては、絕えて一言も洩